

部落問題と浄土真宗

部落の人々と真宗(水平社創立以前)

水平社創立と浄土真宗

水平社創立以前の部落差別問題をめぐる状況

全国水平社創立の精神

水平社創立の精神と浄土真宗

水平社創立の精神を受け止めて

武内了温師と朝野温知師

戦後の武内了温の活動と

同和関係寺院協議会

I 部落問題と浄土真宗

真宗大谷派は、全国水平社の創立以来、被差別部落のご門徒から、教団の差別土壌、次々に惹き起こす差別事件などに対して問題提起や厳しい糾弾を受けてきた。それは、本願寺教団との深いつながりを基底にした、大きな願いと悲しみから発せられるものであった。

このたび宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌を機縁として、あらためて部落差別問題と浄土真宗との歴史と課題に向き合っていきたい。

浄土真宗の教えは、多くの被差別部落の人々の信仰を集めてきた。過酷な身分差別の中を生きる被差別部落の人々にとって親鸞の教えはまさしく生きることの支えとなってきた。部落の人々の中に息づく親鸞の精神が、「全国水平社」を創立する原動力となったと言われている。

水平社同人が願ったものは、「吾等は人間性の原理に覚醒し人類最高の完成に向かって突進す」という綱領の言葉が如実に語るように、人間が人間として生きるとはどういうことかをとことん求め、自覚し、その道を歩むということであった。

そのような自他平等の世界を求め、親鸞聖人の教えに生きようとする水平社同人の願いを阻もうとしたのが、親鸞聖人の教えや生きざまに背違しているとしか思われない東西両本願寺のあり方であった。東西両本願寺に対して水平社同人から、募財拒否という具体的な行動提起とともに、「親鸞に帰れ」という悲痛な叫びが向けられたのである。

この問いかけは、現在も私たちの上に投げかけられている。それが、1969年の難波別院輪番差別事件から始まる幾多の糾弾会であった。それらの糾弾会をとおして明らかにされてきたことは、寺格・堂班制度など制度にまでなった根深い宗門の差別体質と、被差別部落のご門徒の声を真に受け止めることができない教学のあり方であった。宗門が糾弾で問われてきたこの40年は、そのまま「同朋会運動」を展開してきた時間(とき)であった。教団は、同朋会運動を推進すると喧伝しながら、「同朋」という名に、差別に苦しむ人々の存在を見出すことができなかったといわざるを得ない。

私たちはどんな親鸞聖人を宗祖としてきたのか。水平社同人や、今も差別に苦しむ人々は、親鸞聖人から差別に立ち向かう勇気をもらい、解放運動に推進してきた。同じ教えを聞いてきた私たちが、なぜ、共に解放運動を歩めなかったのか。宗祖が語られた「いし、かわら、つぶてのごとくなるわれら」という言葉の、「われら」の世界を見失っていたのはどうしてなのか。

今、まさに、宗祖の七百五十回御遠忌をお勤めし、同朋会運動50周年を迎えるにあたり、先人たちの歩みをたどり、問いかけに向き合い、親鸞聖人の確かな教えを相続し、その願われた差別の無い世界の実現を目指していきたい。

部落の人々と真宗(水平社創立以前)

水平社創立の前年の1921年の内務省調査では、全国の被差別部落戸数の82.1パーセントが、浄土真宗の門徒であることがわかる。水平社創立時に、「部落民の絶対多数を門信徒とする東西両本願寺」という表現が用いられているが、この調査はそのことを実証するものと言えよう。

被差別部落と浄土真宗の関係は、一朝一夕に成り立ったものではなく、長い年月をかけて生まれてきたものであった。被差別部落の圧倒的多数が浄土真宗の門徒であるということについては、様々な説があり、いまだ定説化されていない。しかし、差別を受けてきた人たちと親鸞聖人の教えが、長く深い関係をもっていたことだけは紛れもない事実である。

そしてそれは、幕藩体制下のはるか以前、蓮如上人が生きた時代の被差別民衆と本願寺教団との関係、さらに親鸞聖人と被差別民衆との出会いというところまでさかのぼって考えていかなければならない課題である。

さて、本願寺教団は、親鸞聖人にこそよせるそれらの人々に、どのように向き合ってきたのか。その歴史を問い直すということは、本願寺教団が親鸞聖人の教えに生きる教団であったのかどうかを明らかにしていくことにつながると言えよう。



親鸞聖人絵伝

個人蔵

親鸞聖人の入滅の図の中に、被差別民衆が描かれている（右側山のかげ）。この図に対しては、親鸞聖人と被差別民衆の特別な関係を示すものとは言えないという見解がある一方、聖人の死を悲しんでいる姿にも見え、交流のあった親鸞をしたってこの場に来た様子が描かれているという説もある。

具縛の凡愚、屠沽の下類、無碍光仏の不思議の本願、广大智慧の名号を信樂すれば、煩惱を具足しながら、無上大涅槃にいたるなり。具縛は、よろずの煩惱にしばらくたるとるわれらなり。煩は、みをわずらわす。悩は、こころをなやますという。屠は、よろずのいきたるものを、ころし、ほふるものなり。これは、りようし（獵師）というものなり。沽は、よろずのものを、うりかうものなり。これは、あき人なり。これらを下類というなり。（略）りようし・あき人、さまざまのものは、みな、いし・かわら・つぶてのごとくなるわれらなり。

唯信鈔文意のことば

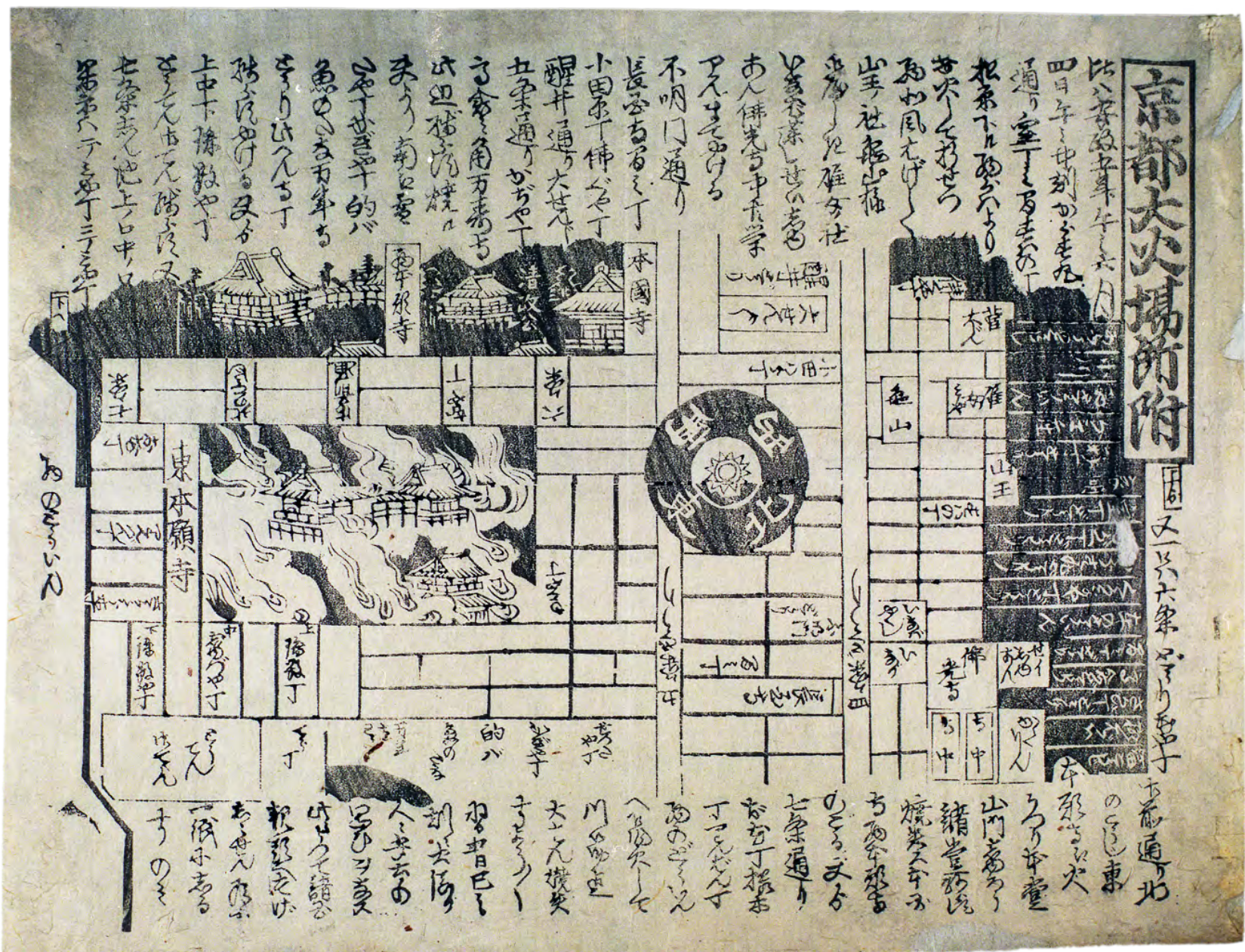
『真宗聖典』552 頁

東派浄土真宗一派階級之次第

「東派浄土真宗一派階級之次第」は、大谷派において、「穢多寺」という文言の初出資料である。ここには、それを「別種」のものとし、また「外交リ之ナシ」（部落寺院以外との付き合いをしない）「本山ニオイテ剃刀コレナシ」（本山で得度剃刀を行なわない）などが定められている。本願寺派に関わる資料「諸事心得之記」によれば、各種の冥加金は他の寺の「五割増し」とあることから、大谷派においても、それと同様の差別を行なっていたと推測される。またこの資料からは、「院家」という言葉と「穢多寺」という言葉が対比されており、部落差別問題と天皇制の問題の関係を読み取ることができる。

十一月十六日
一、晨朝過に西宗寺已下十八人同道、六条へ下り御道具類御焼残り取調候事

但六条村、柳原口、□村、近郷へ御堂御道具類始其外村へ引取に付、両村へ至り相取調候處、唐戸障子、本堂、宮御殿、其の外香部屋の品々迄、寺々を始在家迄に在之候御道具、御寺内寺々へ引取候旨申合候也、（後略）



被差別部落御門徒の消火活動

京都大火場所附 1858年 大塚隆氏 蔵
東本願寺は、1788年1月、1823年11月、1858年6月、1864年7月の4度にわたって、両堂をふくめ諸堂が全焼する火災にあった。東本願寺における火災に際して、京都中の被差別部落の御門徒が駆けつけて消火活動を行なった記録が数多く残されている。

1858年文政期の火災を知らせるこの瓦版には、東本願寺が炎につつまれている様子が、ありありと描かれている。

浅草御坊輪番日記

1823年11月に火災した文政時の火災の記録では、両堂の道具類などは、近隣の被差別部落に保管されていた。それは、唐戸障子、本堂、宮御殿、その外香部屋の品々にまでおよぶ。被差別部落の御門徒は、懸命に消火活動を行なうなか道具類などを持ち帰って、翌日まで在郷の寺々や御門徒の家々に大切に保管していた。

東本願寺再建時時太鼓

東本願寺 蔵

太鼓職人は、胴の内側に屋号や職人自身の銘(名前)を書き入れる。太鼓が破れなければ気づくことはないが、内部に残された力強い墨書きからは、太鼓造りにかける職人の誇りが感じられる。ここに記された内容から、この太鼓が現在の福井市舟橋町で作製され、京都東本願寺に運ばれて使用されたことがわかる。そして1866年、京都の太鼓職人橋村理兵衛氏によって太鼓の皮が張り替えられている。さらに1870年の2月と12月にもそれぞれ片側ずつが張り替えられている。

記された年代から、この太鼓が東本願寺両堂再建時に使われた時太鼓と察せられる。

鼓面の直径1.12メートル、胴の長さ1.48メートル



越前之國
吉田郡
森田 駒舟橋邊
金剛
仁藏 作之

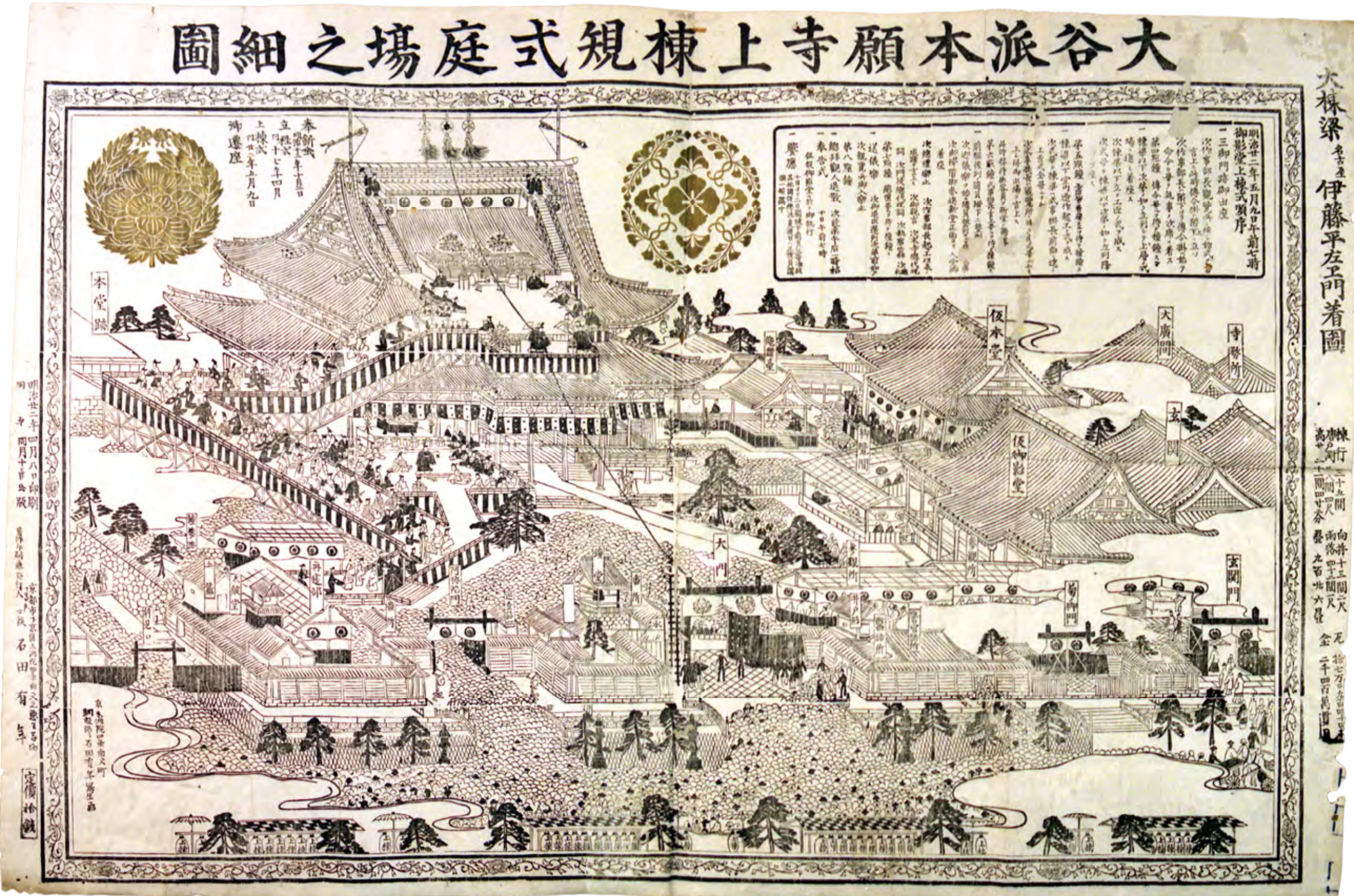
慶応貳ひのえ寅年八月十五日
御太鼓張替
寄進人三條天部
太鼓師
橋村理兵衛
綱友花押

明治三庚午年二月
御太鼓張替
三條天部村
太鼓師
橋邑理兵衛
綱友

明治三庚午年十二月吉日
三條天部西町
本家御太鼓師
橋村理兵衛
綱友花押
細工人儀兵衛

上棟規式庭場之細図

宇治市歴史資料館 蔵(寄贈 大塚 隆氏)
1889年5月9日、再建にあたって執行された上棟式を示す絵図。左手下部、「再建部」横に「太鼓堂」が見える。東本願寺再建にあたって、太鼓が太鼓堂にかかげられ、作業の始まりや休憩時間をしらせる時太鼓として使用された。





大谷祖廟 時太鼓

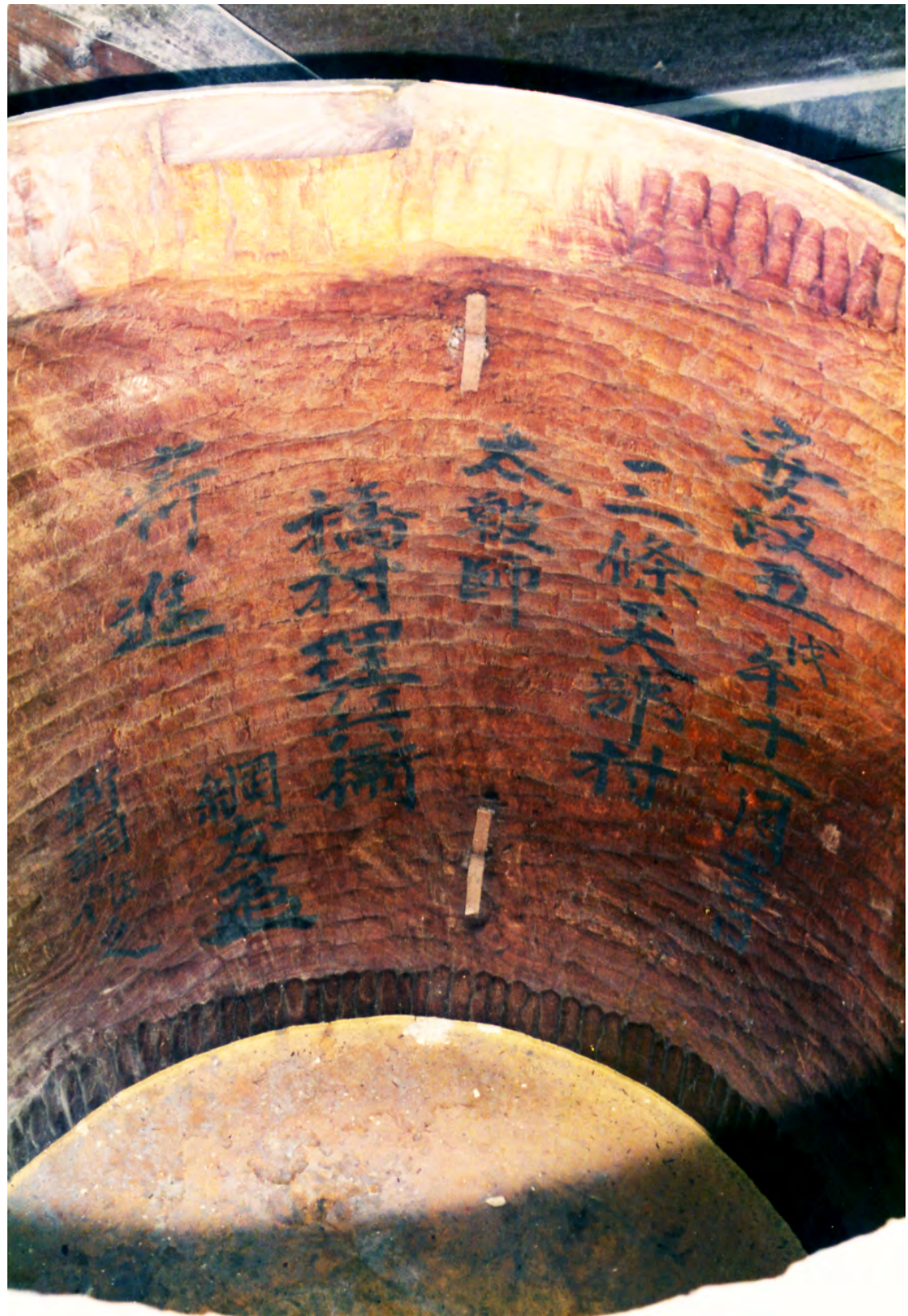
大谷祖廟太鼓堂に保存されている時太鼓。1858年に京都を襲った安政の大火により、東本願寺は両堂、諸堂を含め、太鼓堂鐘楼とも全てが焼け落ちた。臨時の措置として本山東本願寺の機能は、大谷御坊(現在の大谷祖廟)に移された。法要の際には、大谷祖廟の時太鼓が法要の始まりを知らせた。同年11月14日、仮本堂、仮御影堂に、御本尊、宗祖御木像が遷座されると、大谷祖廟の時太鼓は、本山東本願寺に移されたと考えられる。一方、大谷祖廟では太鼓師理兵衛氏からの寄進を受け時太鼓を新調している。太鼓内部の記載などから、この時太鼓がそれと考えられる。



祖廟太鼓堂

大谷祖廟に現存する太鼓堂。

現在、ここで月2回定例法話が開かれている。太鼓堂のやぐら部分に、この時太鼓が保存されている。



安政五戊午年十一月吉日	寄進	明治四辛未年三月吉日
三條天部村	新調作之	洛東天部村
太鼓師		太鼓師
橋村理兵衛		橋村理兵衛
綱友花押		片草張替

時太鼓の内面に残された職人の銘

大谷祖廟太鼓堂の時太鼓には、東本願寺再建時の時太鼓と同じ職人の銘と花押が書き込まれている。

Ⅱ 水平社創立と浄土真宗

① 水平社創立以前の部落差別問題をめぐる状況

1868年に成立した明治新政府の至上課題は、強力な統一国家を建設することであり、新たな民衆支配体制の確立を目指して天皇を中心とした中央集権的政策を強引に行っていた。1871年に発布された賤称廃止令もその一環として、近代国民国家の形成を目指して不都合となってきた近世賤民制を解消するために発布されたのである。

この法令により「穢多非人等」の賤称は廃止されたが、被差別民衆はそのまま、社会の最底辺に移し換えられ、近代身分制の中で新たな部落差別の構造が作り出された。被差別部落の人々は、皮革製品の製造など、これまでの部落産業の多くを奪われ、しかも国民としての義務を負わされ、その生活はそれ以前より一層厳しいものになっていった。

一方、この法令は、国家の意図とは別に被差別部落の人々に希望を与え、旧来の差別的慣行を打ち破るなど自覚的行動をうながした。しかし、そのような行動を、部落大衆が傲慢になったととらえ、解放令反対を掲げ、部落を襲撃する人たちも表れた。

日清、日露の二度の戦争により、都市における貧民の増加、農村の疲弊などの社会矛盾が顕在化し、社会構造の変革をめざした社会主義が勢いをもつようになった。この危機をのりこえるために、社会主義者への徹底的な弾圧を行うとともに、地方改良運動の展開、済生勅語の発布や恩賜財団済生会の創設など、恩寵的政策が次々と打ち出された。

1907年に始まる部落改善運動はこの一環としてはじめられたものであるが、それは、部落大衆の習俗・職業が「野蛮」であるとして、そこに差別の原因を求め、この現状では差別されても当然であるという認識に立つものであった。

また、大正期に入ると、国家は明治天皇の仁慈を強調するようになり、部落改善運動を担う融和団体として1914年に設立された帝国公道会などにより、賤称廃止令も明治天皇の仁慈と宣伝され、天皇制を基調とした「同情融和論」が強く植えつけられていった。

そのような時代的背景の中で全国水平社は設立されることとなる。

穢多非人等ノ稱被廢候
條自今身分職業共平民
同様タルヘキ事
同上府縣へ
穢多非人等ノ稱被廢候
條一般民籍ニ編入シ身
分職業共都テ同一ニ相
成候様可取扱尤地租其
外除蠲ノ仕来モ有之候
ハ、引直シ方見込取調
大蔵省へ可伺出事



太政官布告として1871年に出された賤称廃止令一般的に解放令とも呼ばれている。

弾左衛門
江戸から関八州の被差別民衆を治めていたが、この賤称廃止令によって特権を奪われた。



石碑に刻まれた文(現代語訳)

明治六年、私の屋敷は、漠然とした焼野原になり、父と兄は凶徒の刃で歿くなった。

その無念さをよく言葉でいい表せず、天に叫び、地に泣き伏して哀泣の声をあげ、悲しみつづけて、ついに血を吐くに至った。しかし、当時私たちは年が若く、為すすべもなく、ただ役人の手を空しく待つばかりであった。ようやく凶徒を罰したとはいえ、亡くなった者の心に、十分報いることができたとは思わない。今ここに大正一一年となり、五〇回忌をむかえる。墓にきたって過ぎ去った昔の事件を想うと、死んでいった者への悲しみをどこに措いてよいかわからない。流れる涙を墨汁にかえて、七律一首を詠み、霊前に捧げよう。

昔のことははるかに遠ざかり、屋敷の跡も荒れ果てた／ふりかえれば五〇年が経っている／恨みは旧い出来事と共によみがえって絶えることがない／愁いは浮雲と共にいよいよ長く留まっている／線香の煙は数本の糸筋となって立ち昇り、寂しさに添える／一對の斑鳩の哀しむ声が、はてしない蒼空をつらぬく／ため息をついて涙をのみ、私はただ空しくたたずむばかり／寒さの中で墓碑銘を読み終えると、夕陽はもう沈もうとしている。

(好並隆司さん訳)

岡山県で起きた解放令反対一揆の被害者の追悼碑

1922年、50回忌法要に合わせて建立した。虐殺された4人と、その惨状を目の当たりにした母親の法名が記されている。この碑文を書いたのは、襲撃された被差別部落のリーダーの実子である。父と兄と家、そして村を失った悔しさを綴ったものである。

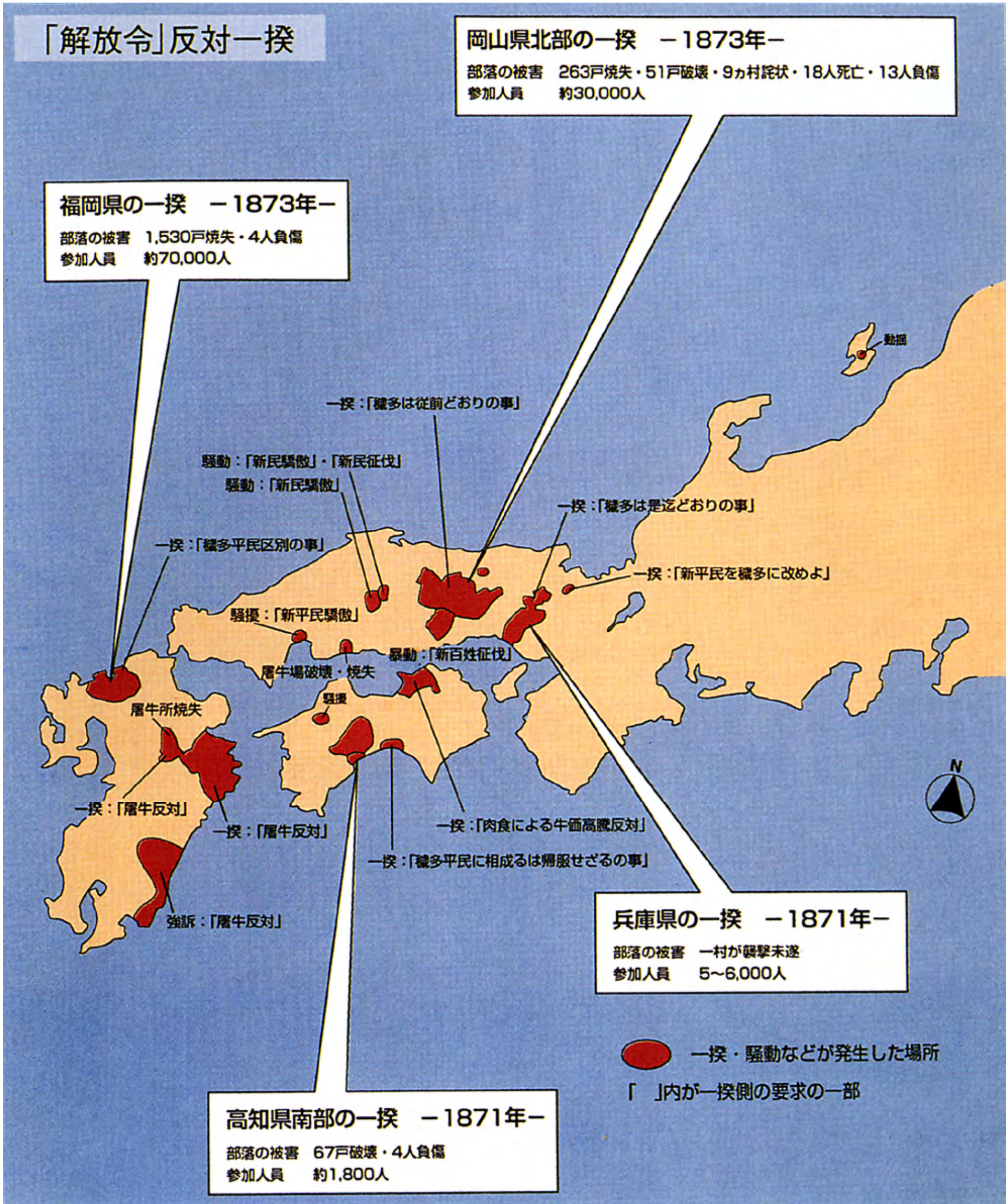


表2-① 被差別部落の宗教調査					
		戸 数 (比率%)			現住総数
		浄土真宗	日蓮宗	その他	
青山福	森形島	5 (13.5)	3 (8.1)	29 (78.4)	37
		198 (95.2)	—	9 (4.3)	208
		69 (37.5)	3 (1.6)	112 (60.9)	184
茨城群千埼東神奈	城木馬葉玉京川	126 (18.0)	62 (8.9)	512 (73.1)	700
		593 (28.9)	81 (3.9)	1,378 (67.2)	2,052
		509 (12.9)	43 (1.1)	3,407 (86.1)	3,959
		—	118 (24.9)	356 (75.1)	474
		1,551 (32.6)	262 (5.5)	2,949 (62.0)	4,758
山長新富石福静愛岐	梨野鴻山川井岡知阜	611 (37.0)	118 (7.1)	922 (55.8)	1,651
		96 (10.3)	793 (85.1)	43 (4.6)	932
		37 (12.5)	55 (18.6)	203 (68.8)	295
		1,044 (32.6)	215 (6.7)	1,941 (60.7)	3,200
		366 (63.1)	117 (20.2)	97 (16.7)	580
三滋奈和京大兵		1,370 (94.9)	59 (4.1)	15 (1.0)	1,444
		718 (74.3)	44 (4.6)	204 (21.1)	966
		478 (100.0)	—	—	478
		10 (0.4)	2,222 (96.4)	72 (3.1)	2,304
		957 (70.1)	241 (17.7)	167 (12.2)	1,365
鳥島岡山		917 (98.8)	—	11 (1.2)	928
		6,598 (93.1)	11 (0.2)	480 (6.8)	7,089
		4,847 (99.3)	1 (0.0)	34 (0.7)	4,882
		6,427 (100.0)	—	—	6,427
		7,338 (98.7)	13 (0.2)	87 (1.2)	7,438
徳香愛高		7,611 (89.4)	4 (0.0)	900 (10.6)	8,515
		8,119 (83.1)	7 (0.1)	1,647 (16.9)	9,773
		17,344 (93.5)	125 (0.7)	1,078 (5.8)	18,547
		3,001 (99.9)	—	5 (0.2)	3,006
		993 (63.5)	46 (2.9)	526 (33.6)	1,565
福大佐長熊宮鹿児		6,126 (69.6)	504 (5.7)	2,176 (24.7)	8,806
		7,961 (99.2)	5 (0.1)	58 (0.7)	8,024
		3,870 (96.6)	25 (6.2)	111 (2.8)	4,006
		3,704 (97.7)	—	87 (2.3)	3,791
		1,747 (91.9)	15 (0.8)	138 (7.3)	1,900
岡分賀崎本崎島		8,486 (98.7)	12 (0.1)	100 (1.2)	8,598
		4,298 (78.5)	3 (0.1)	1,176 (21.5)	5,477
		12,559 (97.3)	24 (0.2)	331 (2.6)	12,914
		1,333 (95.1)	10 (0.7)	59 (4.2)	1,402
		91 (21.8)	316 (75.6)	11 (2.6)	418
計		374 (74.2)	7 (1.4)	124 (24.6)	504
		2,274 (90.1)	192 (7.6)	58 (2.3)	2,524
		362 (74.6)	16 (3.3)	107 (22.1)	485
		1,565 (93.2)	—	115 (6.8)	1,680
		126,684 (82.1)	5,772 (3.7)	21,831 (14.1)	154,287

注 比率は少数点第2位で四捨五入したので合計はかならずしも100%にはならない。
(出典：内務省地方局『部落に関する諸統計』1921年、原田伴彦編『日本庶民生活史資料集成』25巻所収。)

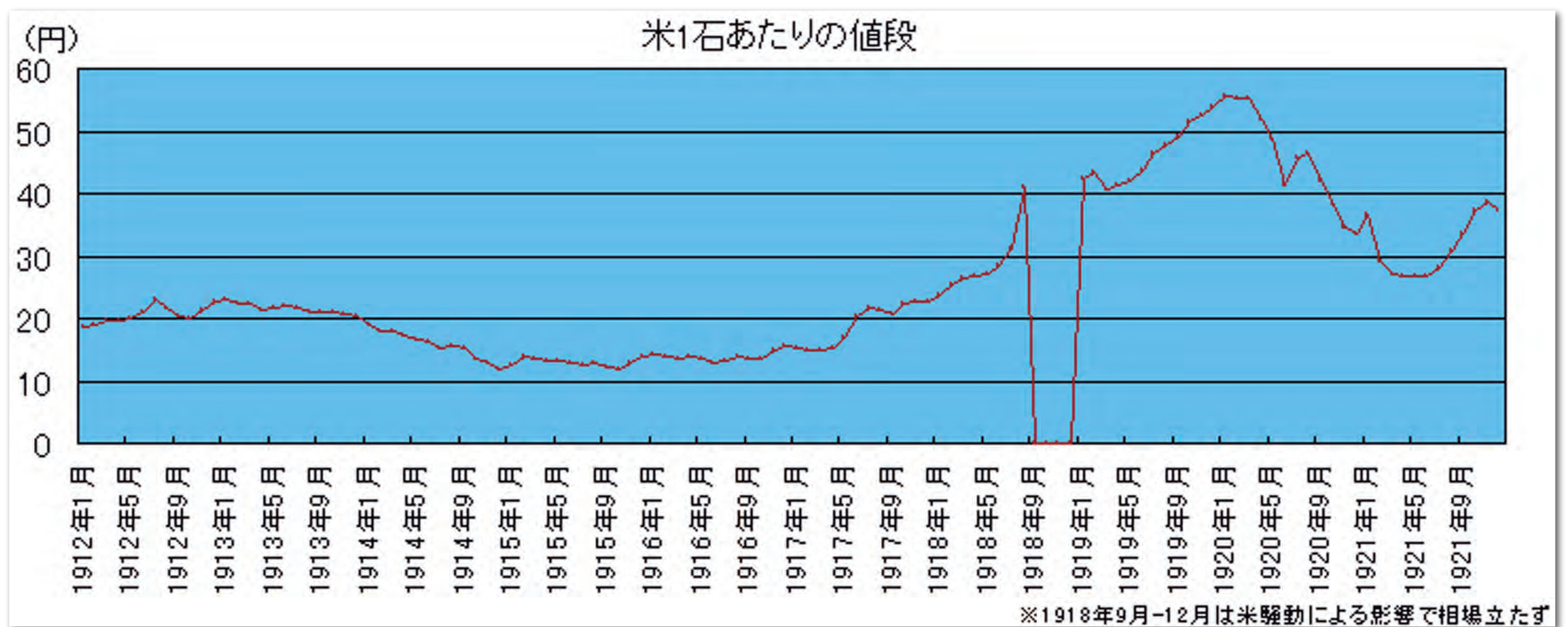
各地の解放令反対一揆

『ビジュアル部落史』(解放出版社刊)より転載

被差別部落の宗教調査

『初期水平運動の社会思想史的研究』藤野豊著より転載

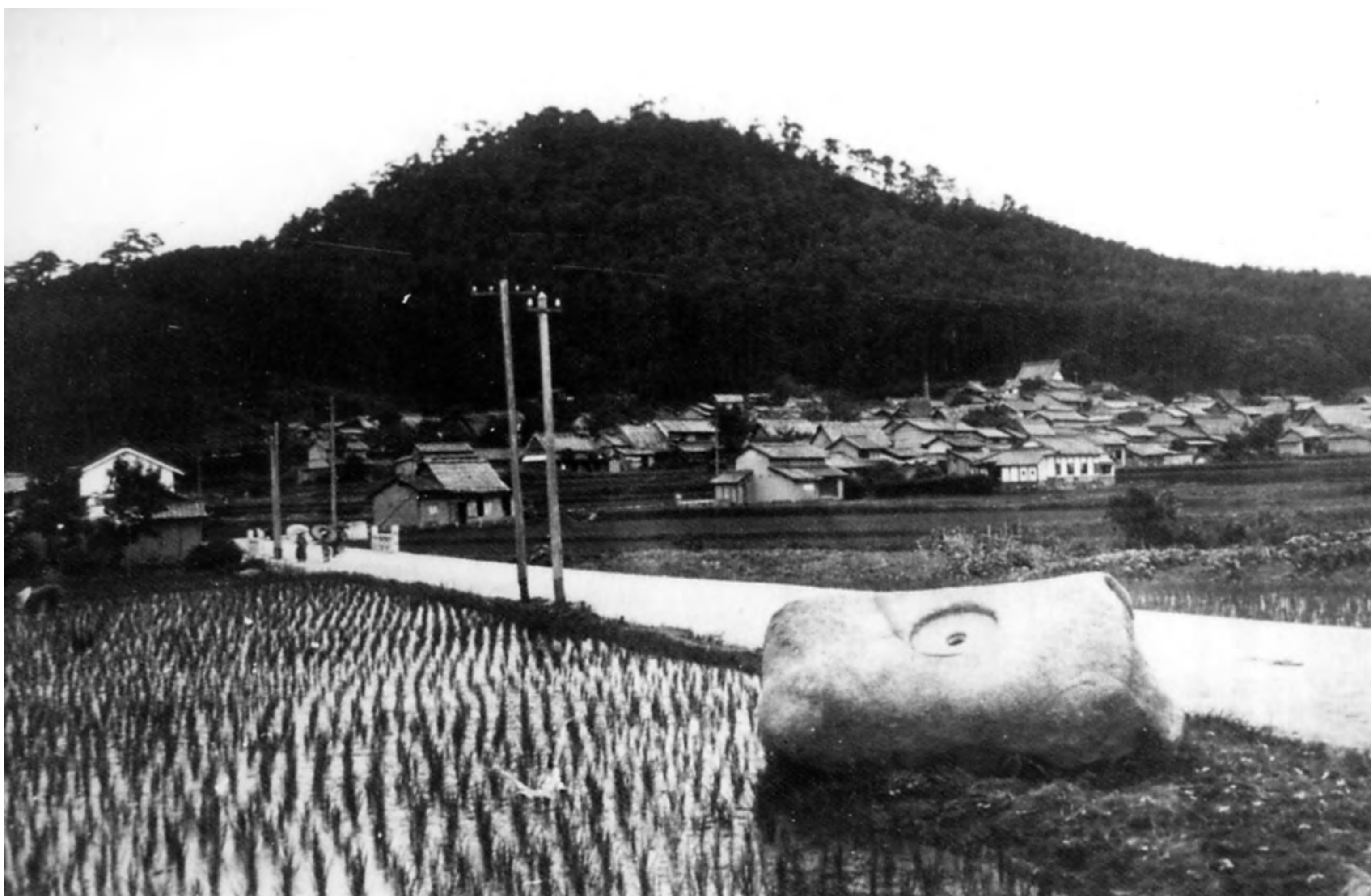
1921年の内務省調査の一覧



米騒動

1918年、農業生産の停滞と米の需要増大、さらに米商人や地主の投機などにより米価は異常にはね上がった。その中で、富山県下の主婦たちが「米よこせ」と叫んで立ち上がったことをきっかけに、米の廉売を求める声は全国に広がり、米屋襲撃にまで至った。

この行動は組織的な闘いではなかったが、国民が生活に根差して国家に抵抗していったものであり、後の全国水平社創立をはじめ、1920年代に展開される諸社会運動に大きな影響を与えた。



洞部落の強制移転

奈良県高市郡白檀村（現橿原市）の畝傍山東北陵は、伝承上の人物である神武天皇の陵墓とされてきた。明治以降、天皇制国家を強固なものにしようとする時の政府は、神武天皇陵の拡張を計画した。ところが天皇陵に「洞村」という被差別部落が隣接していることが問題となり、結果的に洞村は1923年に全村移転することになった。「賤しい」被差別部落が、「神聖な」天皇陵に隣接していることが許されなかったのである。

この問題の背景には、神武陵拡張という天皇制国家の一大事業の推進、一部の融和運動指導者の天皇の「聖帝化」の動きなどに加え、被差別部落から天皇への自主的な土地献納などがあり、この事業は恩寵的部落改善政策のモデルとなっていた。このことは、天皇制がより深刻な形で、被差別部落の中に浸透しているということであり、天皇制と部落差別という問題の根深さを表している。写真は当時の洞村。

綱領

- 一、特殊部落民は部落民自身の行動によつて絶對の解放を期す
- 一、吾々特殊部落民は絶對に經濟の自由と職業の自由を社會に要求し以て獲得を期す
- 一、吾等は人間性の原理に覺醒し人類最高の完成に向つて突進す

宣言

全國に散在する吾々特殊部落民よ團結せよ。

長い間虐められて來た兄弟よ、過去半世紀間に種々なる方法で、多くの人々によつてなされた吾等の爲めの運動が、何等の有難い効果を齎さなかつた事實は、夫等のすべてが吾々によつて、又他の人々によつて毎に人間を冒瀆されてゐた罰であつたのだ。そしてこれ等の人間を動かすかの如き運動は、かへつて多くの兄弟を墮落させた事を想へば、此際吾等の中より人間を尊敬する事によつて自ら解放せんとする者の集團運動を起せるは、寧ろ必然である。

兄弟よ、吾々の祖先は自由、平等の渴仰者であり、實行者であつた。陋劣なる階級政策の犠牲者であり男らしき産業的殉教者であつたのだ。ケモノの皮剥ぐ報酬として、生々しき人間の皮を剥取られ、ケモノの心臓を裂く代價として、暖い人間の心臓を引裂かれ、そこへ下らない嘲笑の唾まで吐きかけられた呪はれの夜の惡夢のうちにも、なほ誇り得る人間の血は、涸れずにあつた。そうだ、そして吾々は、この血を享けて人間が神にかわらうとする時代にあつたのだ。犠牲者がその烙印を投げ返す時が來たのだ。殉教者が、その荆冠を祝福される時が來たのだ。

吾々がエタである事を誇り得る時が來たのだ。

吾々は、かならず卑屈なる言葉と怯懦なる行爲によつて、祖先を辱しめ、人間を冒瀆してはならぬ。そうして人の世の冷たさが、何んなに冷たいか、人間を動かす事が何んであるかをよく知つてゐる吾々は、心から人生の熱き光を願求禮讃するものである。

水平社は、かくして生れた。

人の世に熱あれ、人間に光あれ。

大正十一年三月

水平社

（裏面を見よ）

水平社創立宣言・綱領・決議

全国水平社創立大会において、万雷の拍手で採択された。綱領は目標、宣言は理念、決議は行動を示した。宣言は、日本で最初の人権宣言と言われ、現在の部落解放運動においても、運動に携わる多くの人たちに、差別者、被差別者が共に解放されていく原理として受け止められている。長く西光万吉が起草者とされていたが、近年の研究では西光とともに関東の平野小剣が起草に深く関わったことが明らかにされている。

決議の三番目に東西本願寺への意見聴取があげられていることが注目される。

決議

- 一、吾々ニ對シ穢多及ヒ特殊部落民等ノ言行ニヨツテ侮辱ノ意志ヲ表示シタル時ハ徹底的糺弾ヲ爲ス。
- 一、全國水平社京都本部ニ於テ我等團結ノ統一ヲ圖ル爲メ月刊雜誌『水平』ヲ發行ス。

- 一、部落民ノ絶對多數ヲ門信徒トスル東西兩本願寺ガ此際我々ノ運動ニ對シテ抱藏スル赤裸々ナル意見ヲ聴取シ其ノ回答ニヨリ機宜ノ行動ヲトルコト。

右決議ス

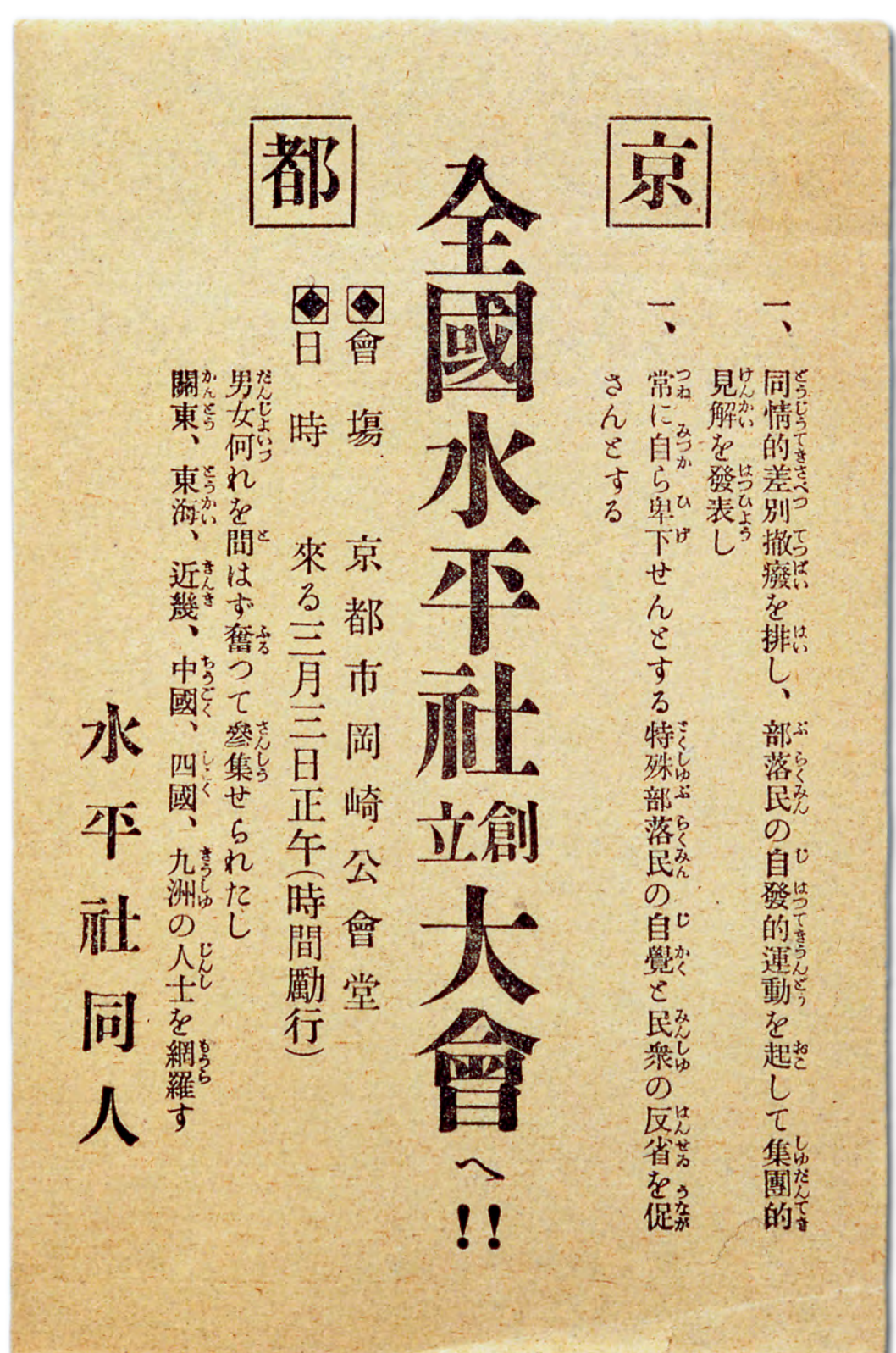
大正十一年三月

全國水平社大會



全国水平社第2回大会、岡崎公会堂

『写真集京都府民の暮らし百年』



チラシ

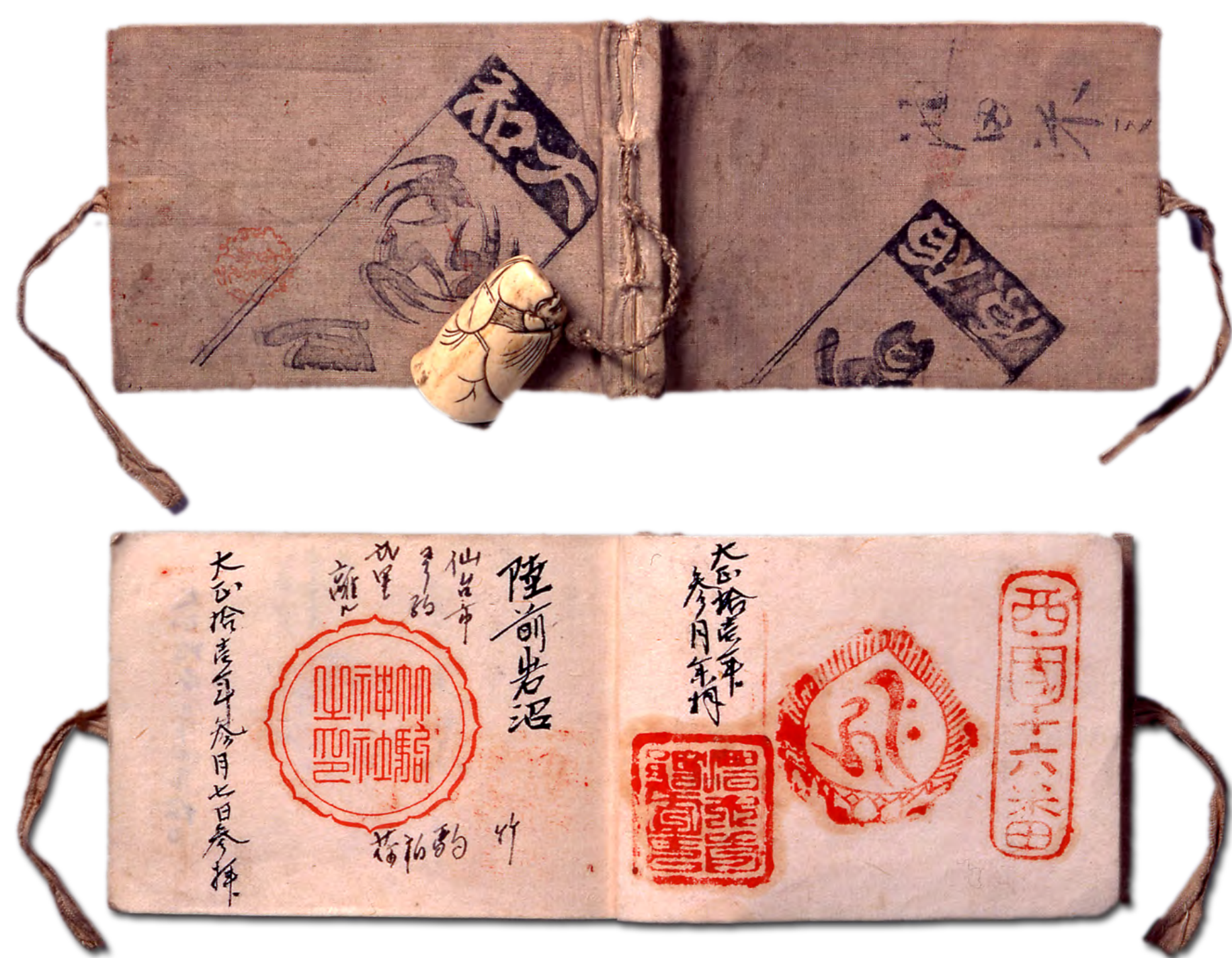
1922年 水平社博物館所蔵

大阪、中央公会堂で開かれた大日本同胞差別撤廃大会において、西光万吉の演説中に二階席から米田富と石田正治によって撒かれた。



全国水平社荊冠旗

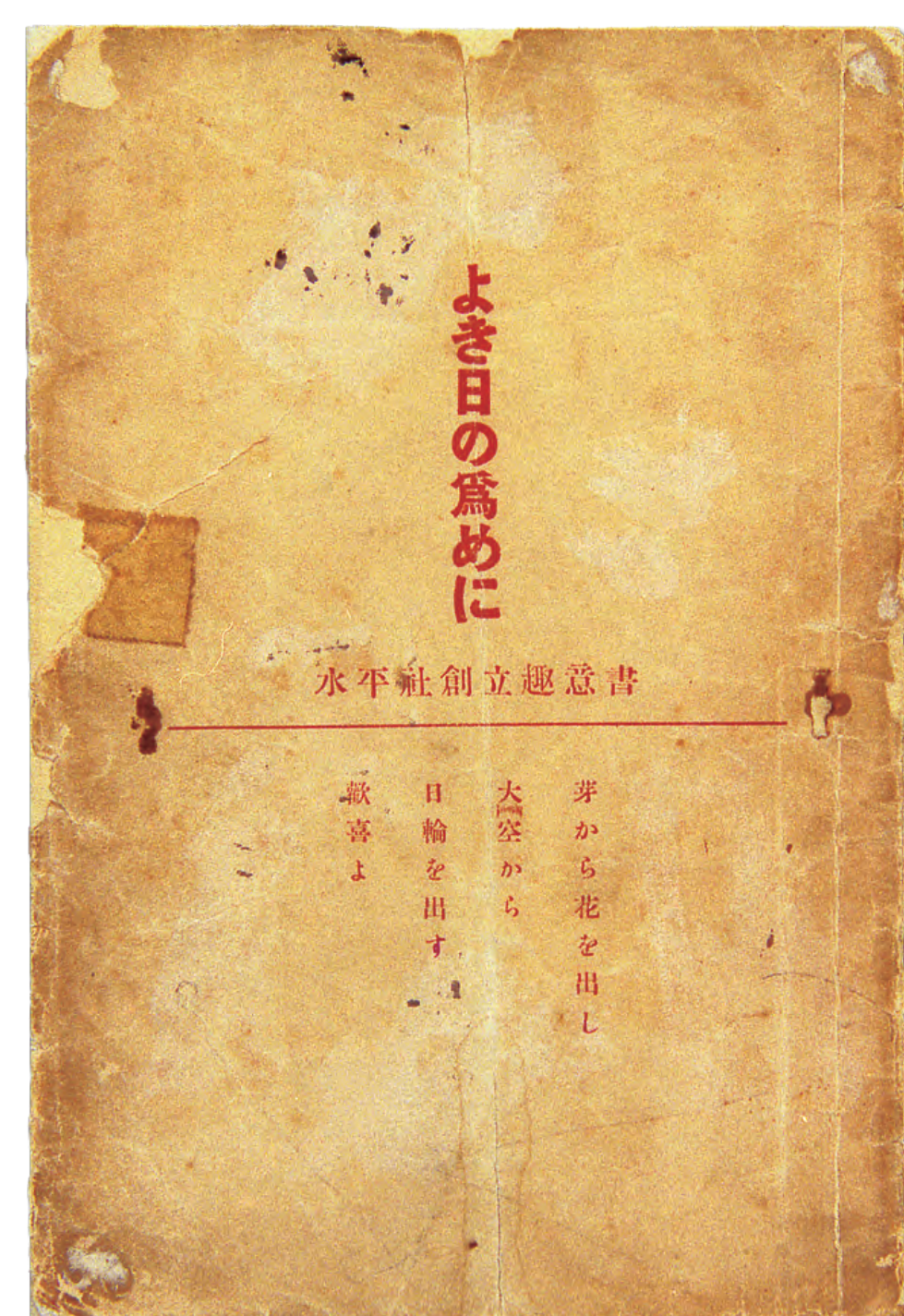
水平社博物館所蔵



燕会集印帳

水平社博物館所蔵

『燕会金銭出納帳』によると3月20日、「記念帳」として50冊作られた。26日の伊勢旅行を機に作成されたものと思われる。燕3羽が円を描いている表紙のデザインは、西光万吉の手によるものといわれている。



全国水平社創立趣意書
『よき日のために』表紙

水平社博物館所蔵

水平社創立趣意書として燕会同人の名前で発行したパンフレット。京都の同朋舎で印刷され、『明治之光』の購読者名簿をもとに全国各地に発送された。ロマン・ローラン、ウィリアム・モリス、ゴーリキー、佐野学などを引用しながら1922年春の全国水平社創立を呼びかけている。

② 全国水平社創立の精神

1922年3月3日、京都市岡崎公会堂に全国各地から3000余名の部落の人々が集まり全国水平社創立大会が開かれた。「人の世に熱あれ、人間に光あれ」と高らかに水平社宣言が読みあげられた。この宣言は、長い間、差別と迫害によってしいたげられていた被差別部落の人々が、みずからの意志で、奪われた人間性をとりかえそうとしたものであり、全人類の解放をうたう、日本初の人権宣言といわれている。

水平社が向き合おうとした課題の一つが、「人間を勲るかのごとき」在り方である。「賤称廃止令」布告を明治天皇の仁慈ととらえ、被差別者の救済という名のもとでなされてきた大和同志会や帝国公道会などの同情や融和という形の運動の本質を、水平社の同人たちは、人間をいたわるかのように見せかけ実は人間の尊厳をかすめとり奪い尽くさんとするものであると看破していた。そのことを、「人間を尊敬することにより自らを解放せんとする者の集団運動を起こせるは、寧ろ必然である」と表現している。また、創立メンバーである西光万吉は、「社会の多数者は吾等を救済し同情することを知っている。しかしながら、人間は尊敬すべきものである事を知らぬ以上、(略)それは潜越な情操であり、専制の行為であって、そこにはあくまでも賤視の觀念が働いている」とのべている。

ここより見れば、水平社の融和運動批判は融和運動そのものに向けられているというよりも、運動に関わるものの主体的動機や部落差別問題の捉え方に向けられた提起であり、水平社の創立は、差別、被差別からの解放されるとはどういうことなのかという根本的問いを投げかけているといえよう。



全国水平社の創立者たち

水平社博物館所蔵

左から、平野小剣、米田富、南梅吉、駒井喜作、阪本清一郎、西光万吉、桜田規矩三

③ 水平社創立の精神と浄土真宗

全国水平社は、その創立大会において「部落民の絶対多数を門信徒とする東西両本願寺」に対し、意見を聴取した上で行動を起こしていくことを決議した。

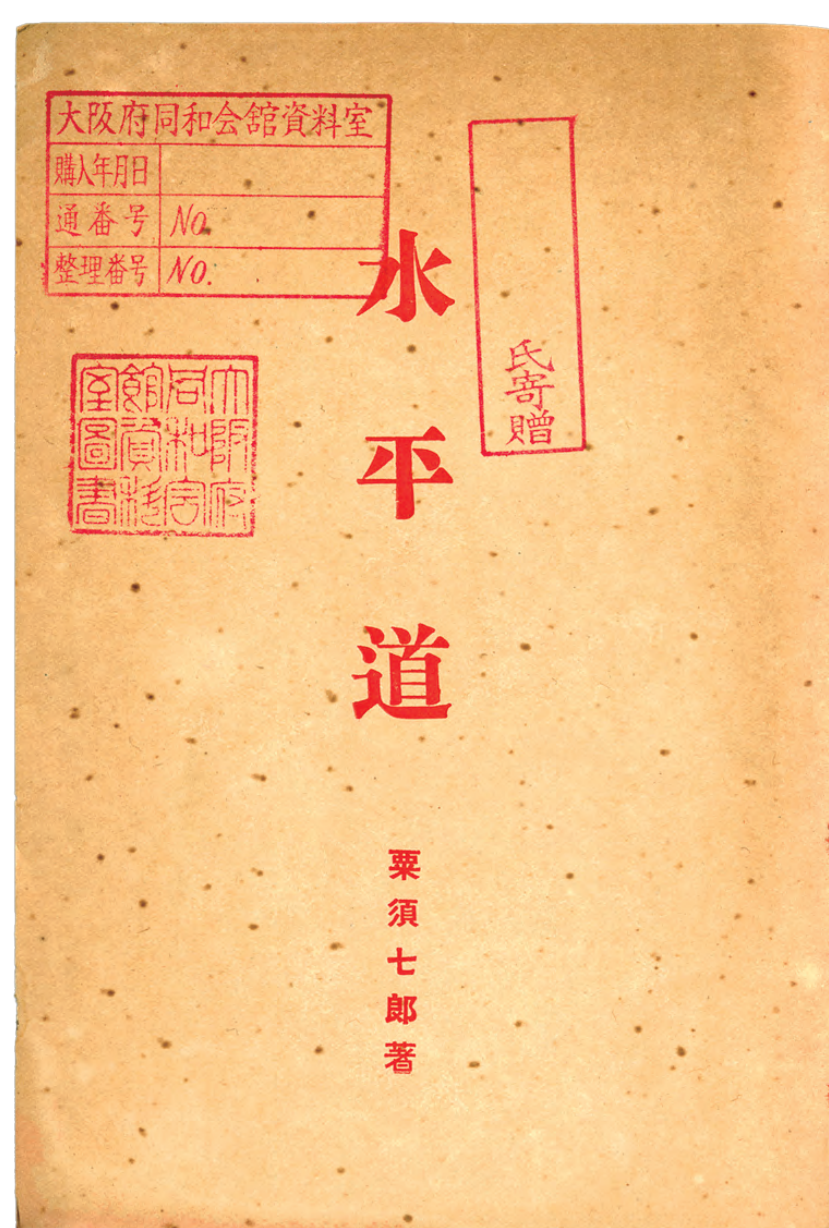
その最初の組織行動が、「募財拒否」運動である。水平社は創立大会の翌日東西本願寺を訪ね、水平社に対する本願寺の意向を糾し、それを受けて「募財拒否の決議通告」を、南梅吉中央委員長名の内容証明郵便で送達したのである。

それに併せて、被差別部落大衆に向けては、「部落内の門徒衆へ!」という檄文を発し、何故水平社が「我々の親筋に当たる本願寺」に対してこのような行動を取るのかということについて、その根底に流れる願いを訴えた。

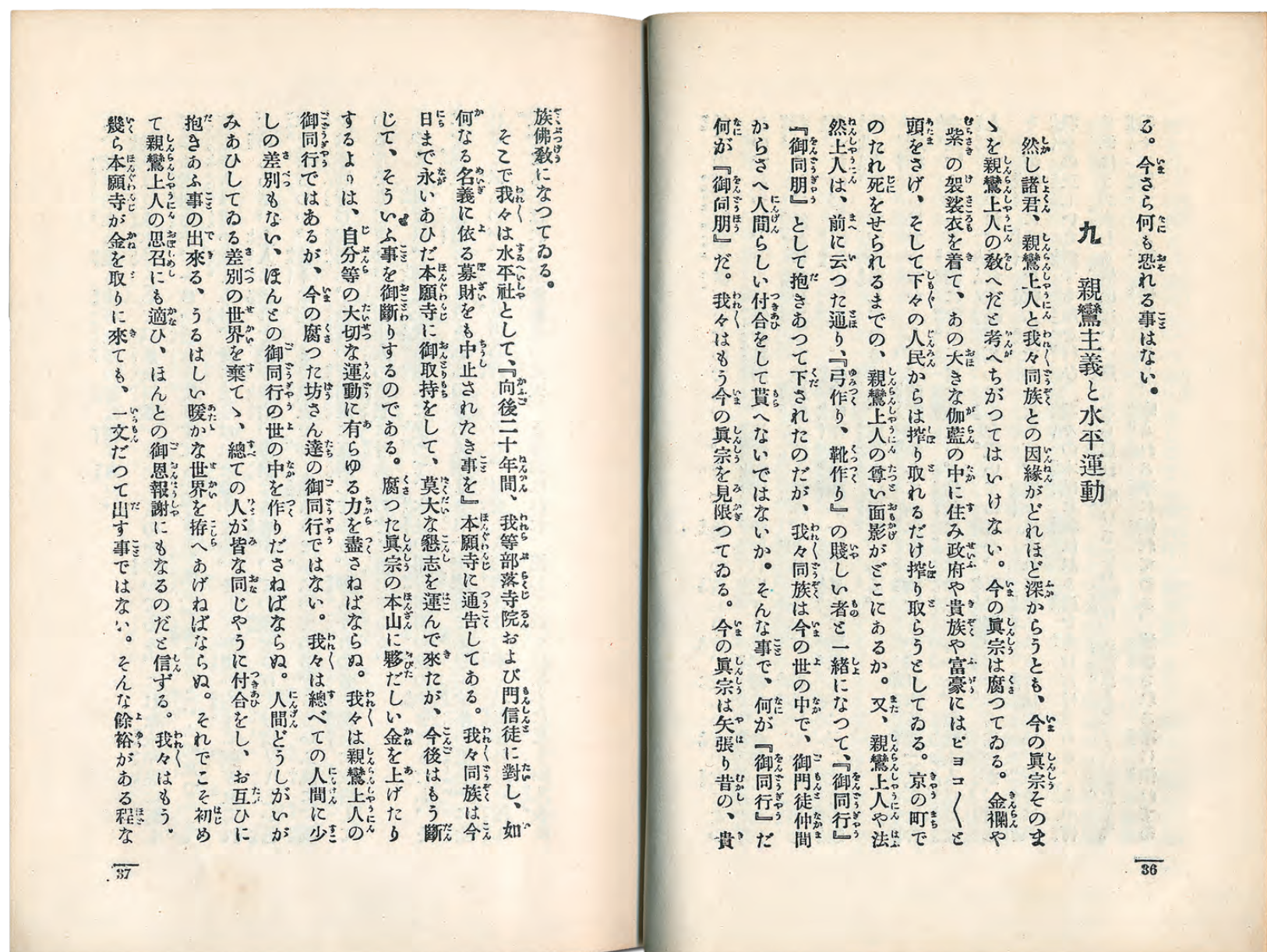
この闘いは単なる権威に対する反発や、経済的理由からなされたものではなかった。「宗教生活を純潔ならしめんが為にも不合理なる本願寺の募財を拒絶する」という言葉が示すとおり、親鸞の精神がその同人たちの行動の原理として自覚的にはたらいっていたのである。

そこに一貫してあるものは本願寺に対する「親鸞に帰れ」という叫びである。

また、水平社の同人たちによって示された、「勤るかのごとき」在り方から、「人間を尊敬することによって自ら解放せん」とする在り方への転換は、宗門近現代史に対する直接的な問いかけでもある。水平社宣言にある「過去半世紀」の間の出来事である、対アイヌ民族政策である「北海道旧土人保護法」の制定、ハンセン病隔離政策の開始、これらに教団は積極的に加担した。近代大谷派教団が、国というものとどのようなつながりをもってきたのか、そしてその中で「救済」という名で何を語ってきたのか、水平社宣言は、これらについても強く問いかけてくるものである。



『水平道』
1929年7月10日
栗須七郎著
大阪人権博物館蔵



人間性の原理に覚醒し、人類最高の完成に向って突進する。おう、人の世に熱あれ、人間に光あれ！

これが水平社のモットーであり、エタ主義の真髓である。エタ主義は即ち人間化主義であり、人間化主義は即ち親鸞主義である。彼等は、この意味からして、今迄も、今も尚、将、永劫へも厳格なる親鸞主義の遵守者であり、神聖なる憧憬者である。

去る三月三日の大会後、半月余にして同月二十一日、水平社即ち部落民の決議として「向ふ、二十ケ年間、如何なる理由に基くも、一切の募財を拒絶する」との決議文を東西本願寺に通告したるが如き痛快事は全く強き、その信仰の具体化であり、而も弘誓に背反せる現代の墮落僧、就中、両本願寺に対する真面目なる、その信仰の戦いである事が証拠だてられる。

信仰のたたかいとしての水平運動

木本凡人「水平社とは」より
水平社を物心両面にわたって支援した木本凡人の言葉。
募財拒否の決議通告を信仰の具体化ととらえている。

それにつけては色々方法もありませうが、私共は先づ第一に我々の親筋に當る本願寺に御頼みして向後二十年間何の御取持ちをも見合せさせて貰ふ事にし、且それだけの費用を以て我々の實力を養ひたいと思ひます。實際略々見て見るに一般から敵國人の様に取扱われ苦しみの中から今日迄本願寺に御取持して莫大な懸志を運ぶ事も結構かも知れませぬが吾々が早く此の思わしい差別を取除いて眞實御同行御同朋と仰せられたやうに如何なる人達とも交際出来るようにする方が何の位御開山様の恩召に叶ふ事が知れません。

ついでには既に本願寺へも此の事を申出ておいた事でですから御不自由のない方も又不如意の方と共に御都合に下さつて私共の主張に御賛成下されば飽くまで此の間三人間同志がいがみ合ひして居る差別の世界を立派な暖かい世界にするやうに御骨折を願ひます。

1923年3月3日、全国水平社第2回大会の様子が報じられている。西本願寺の賽銭箱の上で栗須七郎が演説する様子が写されている。



『水平』2号に挿入された黒衣同盟原稿

「水平社は親鸞主義である」という同人たちの言葉に、僧侶として呼応したのが、本願寺派廣岡智教による「黒衣同盟」の闘いである。しかし、両本願寺は立教開宗700年の慶讃法要を翌年に控えるという大きな局面にありながら、「差別教団からの脱却」を促す問いかけを、教団変革の契機として受けとめることができなかった。



廣岡智教(1888年～1949年)

東西本願寺への募財拒絶を決議した水平社に共感した本願寺派の廣岡智教は黒衣同盟を組織、色衣を廃止、親鸞が着用した黒衣を着用した。



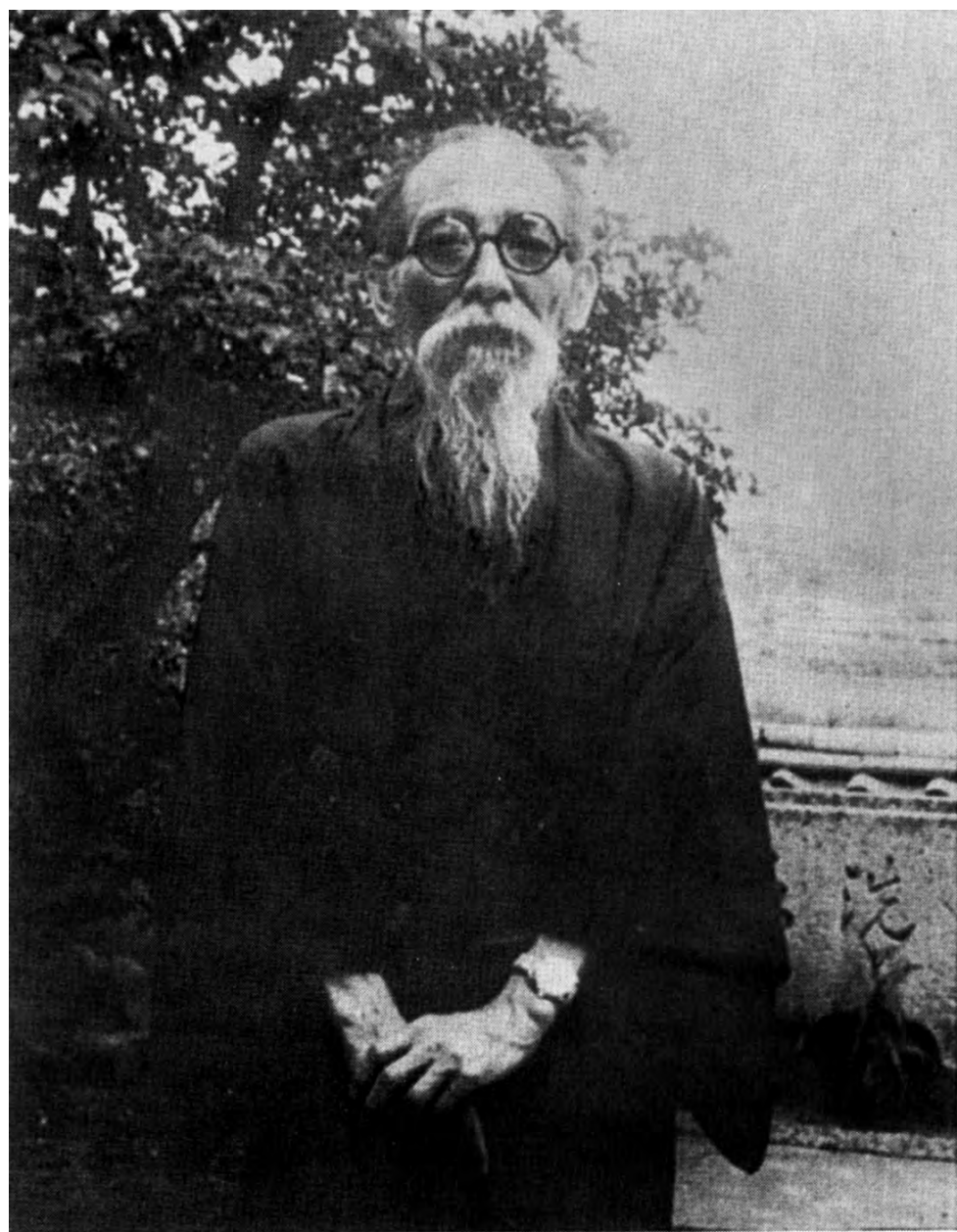
三浦 参玄洞(1884年～1945年)

晩年の三浦参玄洞（大我）。浄土真宗本願寺派の僧侶であり、中外日報社の記者でもあった。彼は、常に水平社を支持し、水平社の対本願寺行動に注目し続けた。

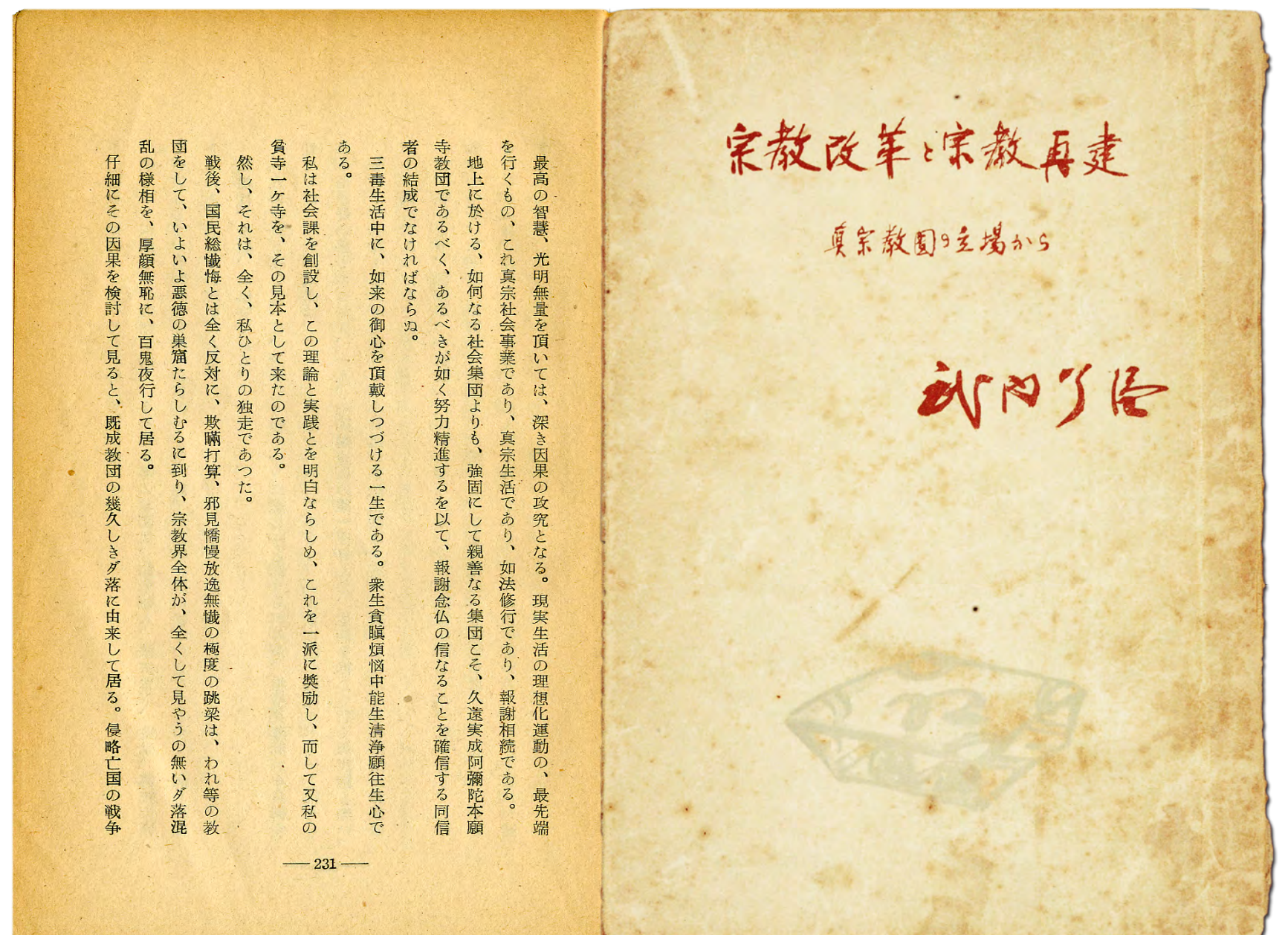
Ⅲ 水平社創立の精神を受け止めて 武内了温師と朝野温知師

「社会課」の設置や「真身会」を設立するなど、その生涯を部落差別問題への取り組みに賭した武内了温は、水平運動に対し「悲痛なる熱烈なる叫び」として終始共鳴した人であった。武内は、「差別者である自己と教団の事実を見つめること」を運動の基底におき、自らの差別性を克服しようとするところに初めて被差別大衆との連帯の可能性があるとし、積極的な活動を展開した。戦後においても、1946年1月、松本治一郎、朝田善之助、北原泰作らと共に、全国部落代表者会議の発起人となり議長を務めた。大谷派における部落差別問題への取り組みの先駆者と言える。

また、朝鮮で生を受けた朝野温知は、18歳で日本にわたり、後に得度して大谷派の僧侶となる。社会課から「同和事業駐在員」の任命を受け解放運動の指導者として運動の一翼を担う。大谷派にあっては、武内の影響を強く受け、真身会解散の翌年に立ち上げた大谷派同和会を支え、同和委員会委員長を務める。その後も糾弾で大谷派が問われる中、その問いかけを正しく受け止め、真の同朋教団たるべく奔走した、大谷派における解放運動の中心的存在であった。



晩年の武内了温（自坊松林寺にて）



『宗教改革と宗教再建—真宗教団の立場から』

「真身会」解散の翌年の武内の著作。あとがきには、自らのこれまでの歩みを振り返っての心情が吐露されている。その中には、「私の独走であったのか」という言葉も見える。



朝野温知の逝去を伝える解放新聞

『解放新聞』滋賀版、1982年3月16日



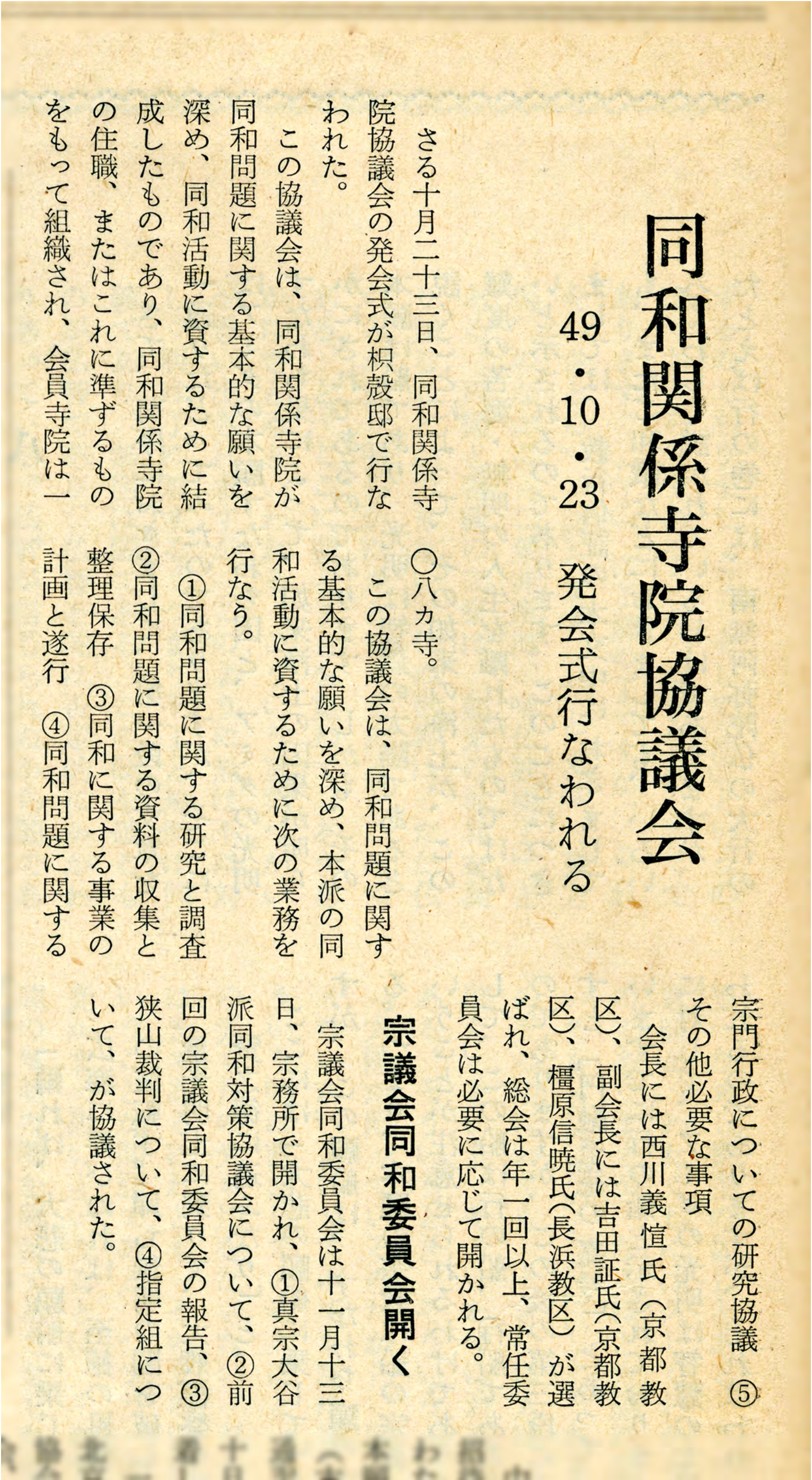
子どもたちと一緒に写る朝野夫妻

一日中働く大人たちが多い中、子どもの入浴や夕食をすませ、寝間着を着せて親に返したという。預かっている子どもと一緒に写る朝野夫妻

同和関係寺院協議会の活動

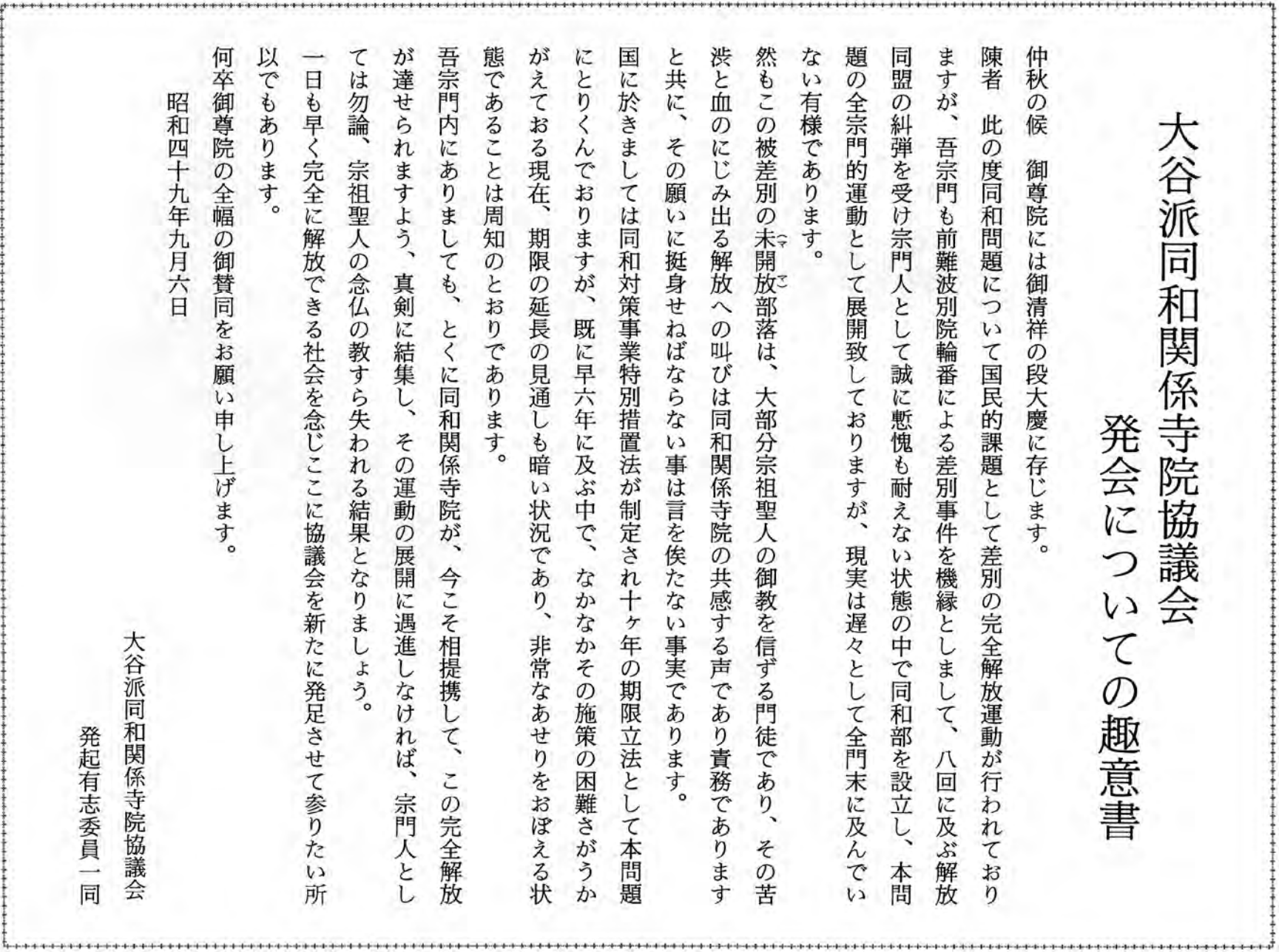
武内が亡くなった翌年1969年には、難波別院輪番差別事件が惹起し、部落解放同盟中央本部から8度にわたる糾弾を受けた。その後も宗門の要職者による差別発言が後を絶たず、幾度も糾弾を受けることとなった。

そのような危機的状況下で1974年に結成されたのが、真宗大谷派同和関係寺院協議会である。1980年に部落差別問題の克服を願い「三要求」を提出。その後も、毎年の総会のほか、現地研修会の開催、『同関協だより』の発行(現在45号まで発行)、『同関協のあゆみ 発足22年を省みて』の発刊、地域にあった活動、研修の充実をはかるための「ブロック協議会」を発足さすなどの取り組みを重ね、結成から四半世紀を経て「三要求」の中の一つであった実態調査が実現、2009年にその結果が「真宗大谷派における部落差別問題実態調査報告書」としてまとめられ発行された。この報告書からは、これからの大谷派における解放運動推進において、向き合っていかなければならない多くの課題を読み込むことができる。「同和関係寺院協議会」と宗派の取り組みとのますますの連携も大切な課題である。



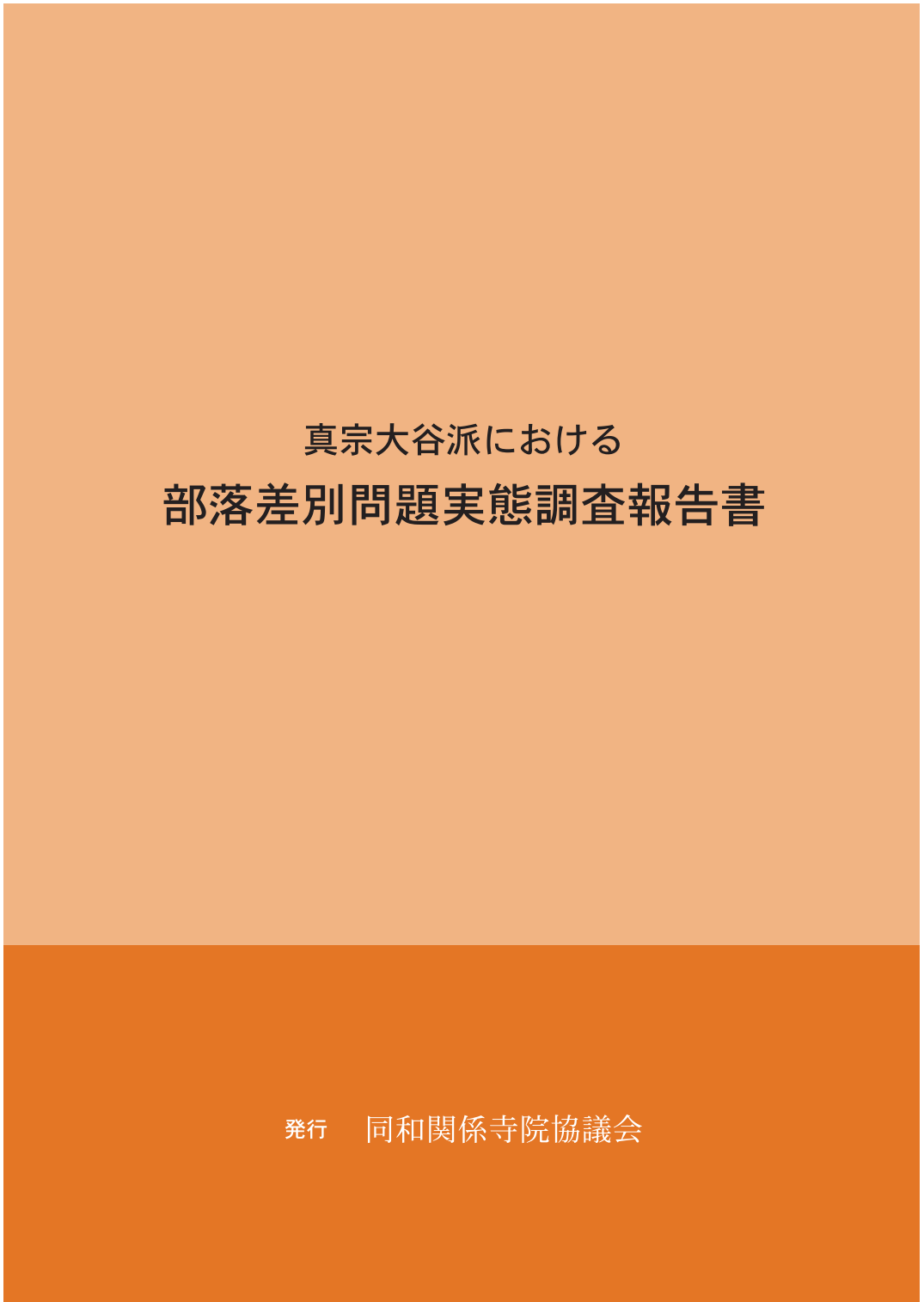
同和関係寺院協議会発会式

『真宗』1974年12月号
1974年10月23日、教団問題や糾弾会が行われる未曾有の宗門の危機の中、真宗大谷派同和関係寺院協議会は結成された。



同和関係寺院協議会発会についての趣意書

1974年9月6日



『真宗大谷派における部落差別問題実態調査報告書』

2009年6月30日 同和関係寺院協議会 発行

「真宗大谷派における部落差別問題実態調査報告書」について

この調査は、宗派における被差別部落寺院のおかれている実態を明らかにし、「同関協」設立の目的である部落差別の克服にむけた活動と、宗派における部落差別問題への取り組みの基礎資料を得ることを目的に、「同関協」が主体となり、宗派が協力して実施したものである。

調査結果からは、同和事業が終了し 10 年がたつ中、かつての「寝た子をおこすな」という意識がまたも大きくなりつつあるという状況が、派内の部落寺院の動向の背景にあることが見えてくる。部落差別問題に取り組むことへの消極的な拒否ではなく、取り組みそのものに対する異論・異議の表明である。部落差別の問題に取り組みつづけていくためには、ますます強固な主体性の確立と意志が必要であるといえよう。

宗派の差別問題への取り組みについては 8 割が肯定的にみているが、部落差別問題を信心の課題とするという考えに対し、肯定的評価は 57.4％にとどまっている。このことは、この間の宗派の取り組みが、部落差別問題を信心の課題とするまでには深められていないことを物語っている。また、この項目に対しては、連区によって調査結果に数字の大きな隔たりがあり、地域ごとに取り組み課題を見ていく必要性が浮き上がる。

このほかにもこの実態調査は、今後の宗門の部落差別問題に対する取り組みの方向に対し多くの示唆を与えてくれるものであり、今回の調査により大変貴重なデータを得たといえる。

		合計	被差別部落門徒の割合					所属連区				
			全て	5割以上	1割以上 5割未満	1割未満	いない	東北連区	北陸連区	東海連区	近畿連区	九州連区
部落問題のポスター・ビラ	総数	100.0 594	100.0 49	100.0 17	100.0 17	100.0 66	100.0 431	100.0 124	100.0 74	100.0 131	100.0 185	100.0 69
	ある	37.4 222	32.7 16	47.1 8	64.7 11	56.1 37	34.1 147	37.1 46	21.6 16	29.0 38	41.1 76	62.3 43
	ない	62.3 370	67.3 33	52.9 9	35.3 6	43.9 29	65.4 282	62.9 78	78.4 58	71.0 93	57.8 107	37.7 26
	無回答	0.3 2					0.5 2				1.1 2	
身元調査お断りプレート	総数	100.0 594	100.0 49	100.0 17	100.0 17	100.0 66	100.0 431	100.0 124	100.0 74	100.0 131	100.0 185	100.0 69
	貼っている	39.2 233	38.8 19	29.4 5	35.3 6	43.9 29	39.7 171	26.6 33	16.2 12	37.4 49	54.6 101	50.7 35
	貼っていない	54.2 322	55.1 27	58.8 10	58.8 10	53.0 35	53.4 230	65.3 81	66.2 49	58.8 77	40.5 75	49.3 34
	そのようなプレートがあることを知らなかった	6.1 36	4.1 2	11.8 2	5.9 1	3.0 2	6.5 28	8.1 10	17.6 13	3.8 5	3.2 6	
	無回答	0.5 3	2.0 1				0.5 2				1.6 3	
過去帳に閲覧禁止の帯封	総数	100.0 594	100.0 49	100.0 17	100.0 17	100.0 66	100.0 431	100.0 124	100.0 74	100.0 131	100.0 185	100.0 69
	貼付している	42.6 253	26.5 13	41.2 7	52.9 9	42.4 28	44.5 192	38.7 48	29.7 22	48.1 63	46.5 86	43.5 30
	貼付していない	51.0 303	67.3 33	52.9 9	41.2 7	54.5 36	49.0 211	58.1 72	58.1 43	45.0 59	47.0 87	52.2 36
	帯封やステッカーの存在を知らなかった	6.2 37	6.1 3	5.9 1	5.9 1	3.0 2	6.3 27	3.2 4	12.2 9	6.9 9	5.9 11	4.3 3
	無回答	0.2 1					0.2 1				0.5 1	

部落問題のポスターなどの掲示・貼付(寺の属性)

この表は、部落問題の取組みごとに、門徒の割合や連区単位での違いを比較したものである。今回の調査の傾向であるが、部落問題の取り組みに対して被差別部落の門徒を抱える寺院でも、積極的・優位な数値は見られない。地域別では、明らかな偏りが見える。

		合計	被差別部落門徒の割合					教区				
			全て	5割以上	1割以上 5割未満	1割未満	いない	東北連区	北陸連区	東海連区	近畿連区	九州連区
総数		100.0 594	100.0 49	100.0 17	100.0 17	100.0 66	100.0 431	100.0 124	100.0 74	100.0 131	100.0 185	100.0 69
信心の課題として取り組むべき問題である		57.4 341	55.1 27	64.7 11	76.5 13	68.2 45	55.9 241	56.5 70	55.4 41	51.1 67	56.8 105	78.3 54
信心の課題とは別で、社会問題として取り組む問題である		22.6 134	22.4 11	17.6 3	11.8 2	22.7 15	23.2 100	27.4 34	16.2 12	29.8 39	22.7 42	10.1 7
お互いの信心さえはつきりすれば、おのずから差別はなくなるので取り組む必要はない		8.4 50	10.2 5	5.9 1		6.1 4	8.6 37	6.5 8	14.9 11	10.7 14	7.6 14	2.9 2
信心の課題とは思わない		7.6 45	10.2 5	11.8 2	5.9 1	3.0 2	7.7 33	5.6 7	10.8 8	6.9 9	8.6 16	4.3 3
無回答		4.0 24	2.0 1		5.9 1		4.6 20	4.0 5	2.7 2	1.5 2	4.3 8	4.3 3

部落問題を信心の課題とする考えへの評価(寺の属性)①

ここでは部落問題は信心の課題であるかという問いに対して、被差別部落の門徒を抱える寺院で平均値を下回っている。これまでの取り組みが被差別部落の門徒を抱える寺院に届いていないといえる。または、これまでの宗派の取り組みに対して異論・異議の表れかもしれない。今後も注目して補足調査が必要である。



『水平』2号に挿入された黒衣同盟原稿

「水平社は親鸞主義である」という同人たちの言葉に、僧侶として呼応したのが、本願寺派廣岡智教による「黒衣同盟」の闘いである。しかし、両本願寺は立教開宗700年の慶讃法要を翌年に控えるという大きな局面にありながら、「差別教団からの脱却」を促す問いかけを、教団変革の契機として受けとめることができなかった。

○大谷派社会事業協会創立に就て

派内社会事業家に告ぐ社会課創立大会 昨年四月紀念法要を機として社会事業大会を開催した際の決議により大谷派社会事業協会設立の準備を進めて居ましたが、三月五日創立委員会を開き會則其他を附議して成案を得ました。それにより本課にて手続の上、會則并に法主臺下を總裁に推戴する事も御允裁を得たので、新法主御婚儀の祝典を行はせらるゝを機とし茲々五月四日夜、高倉會館に於て、創立大会を舉行し併せて派内社会事業功勞者の表彰も行ふ事となりました。協會設立の趣旨及事業等は、次に掲ぐる趣意書と會則により御承知下さつて、奮つて協賛に加盟せられなほ創立大会にも御出席下さつて、東宮殿下御成婚新法主臺下の御婚儀を真に紀念し度いといふ吾等の希願を實現し度と思ひます。

趣意書

寺院は、地方文化の中心として、その地方の精神的並に物質的福利向上の最上の機會でなければならぬと信じます。住職は僧として門信徒は從として、その御堂は最高の敬虔の念の發露として、常相敬愛の遺物として、よく宗教的意義を發揮し來り、又發揮せねばならぬものと信ずるのであります。社會の現状は、特にかかる自覺ある寺院の確立を要求して居ります。然もその因襲の長きと、諸種の事由とはこの

大谷派社会事業協会創立に就いて

『宗報』270号 1924年4月

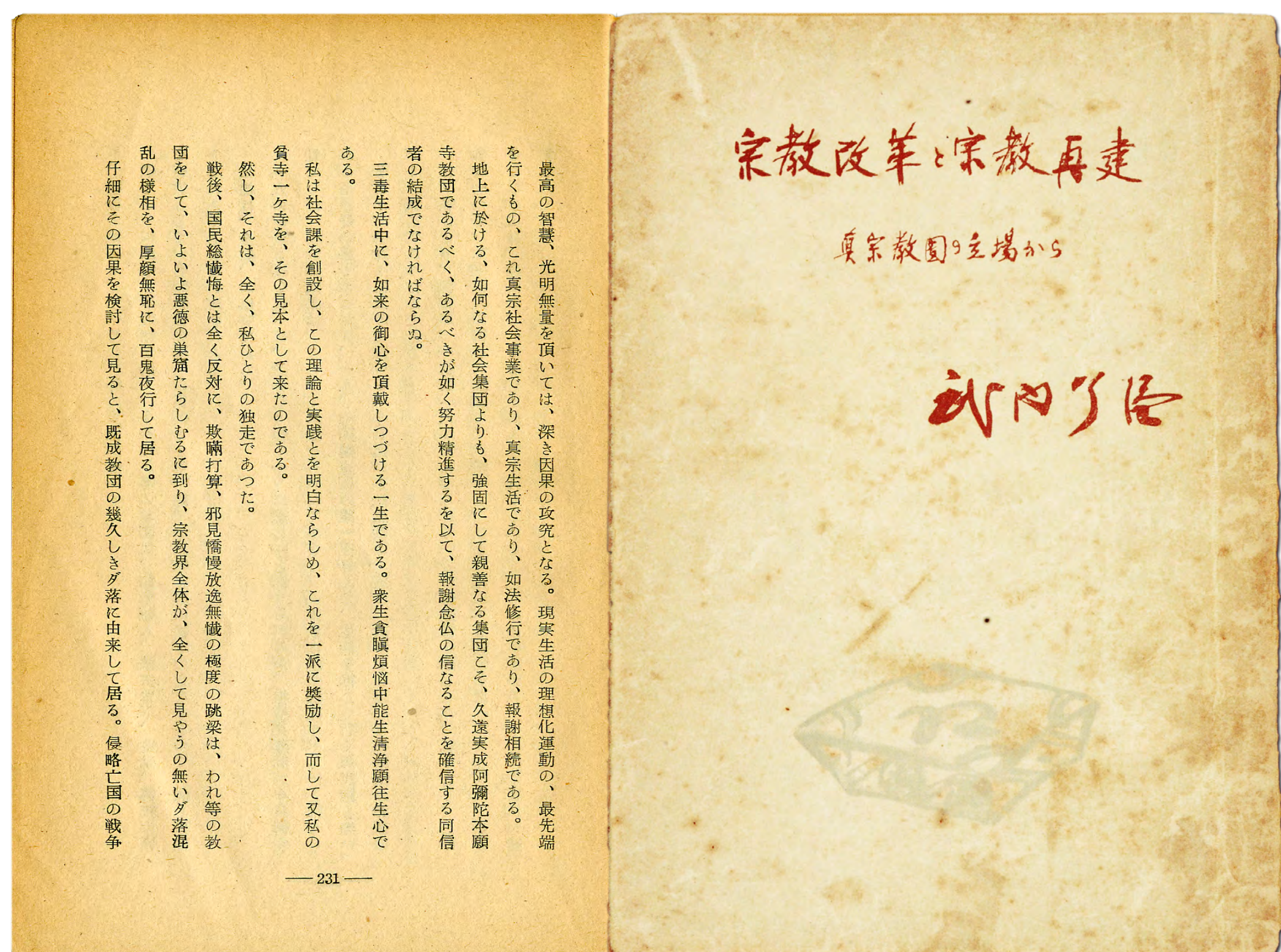
水平社による本願寺への批判が強まるなか、大谷派社会課主事武内了温は水平社の主張に対して深い共感を表明した。社会課は、地方改善協議会の開催(1922年)や、社会事業協会を創立するなど、手探りながらも独自の取り組みを進める。さらに、大谷派による社会事業の不十分さを認識していた武内了温らは、融和運動の系統的・組織的な取り組みを進めるため、1926年3月25日、社会課内に融和運動団体である真宗大谷派真身会を創設する。

Ⅲ 戦後の武内了温の活動と 同和関係寺院協議会

大谷派の解放運動の先駆者の武内了温は、1946年1月、松本治一郎、朝田善之助、北原泰作らと共に、全国部落代表者会議の発起人となり、議長を務めた。しかしその後は大谷派内外ともに、運動の第一線から退いた。解放への胎動にいち早く応じた大谷派ではあったが、武内の力に負うところが大きく、運動は次第に低調になった。武内の志を継がんとする人たちが、大谷派同和会、大谷派同和委員会を創設。朝野温知などを中心に懸命にその運動を守った。

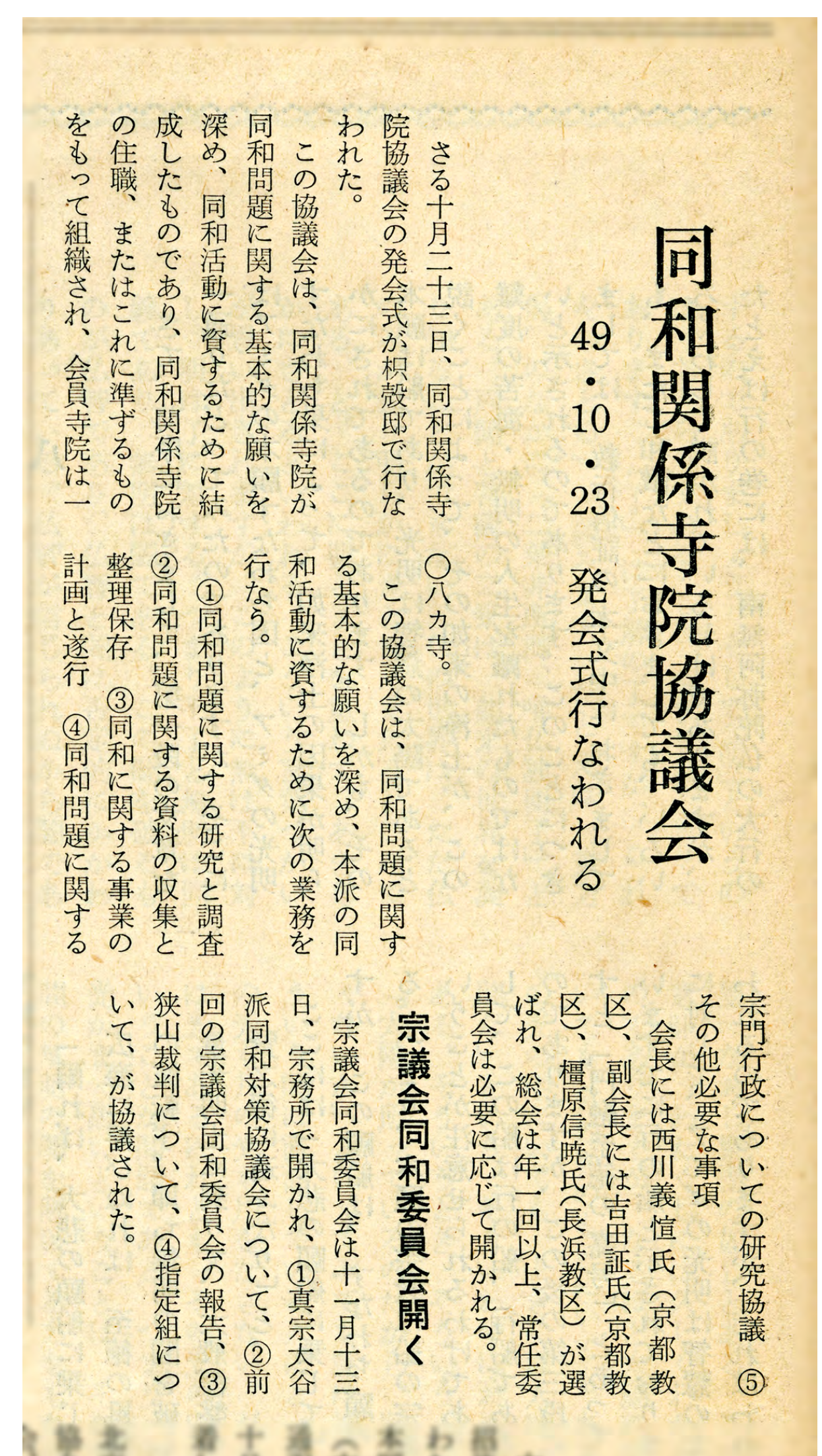
一方、大谷派は次々と差別事件を惹き起こした。武内が亡くなった翌年1969年には、難波輪番差別事件が惹起し、部落解放同盟中央本部から8度にわたる糾弾を受けた。その後も宗門の要職者による差別発言が後を絶たず、幾度も糾弾を受けることとなった。

そのような危機的状況下で結成されたのが、真宗大谷派同和関係寺院協議会である。1980年に部落差別問題の克服を願い「三要求」を提出した。四半世紀を経て2009年に「真宗大谷派における部落差別問題実態調査報告書」がまとめられた。この報告書からは、これから大谷派における解放運動推進において、向き合っていかなければならない多くの課題を読み込むことができる。「同和関係寺院協議会」と宗派の取り組みとのますますの連携も大切な課題である。



『宗教改革と宗教再建—真宗教団の立場から』

「真身会」解散の翌年の武内の著作。あとがきには、自らのこれまでの歩みを振り返っての心情が吐露されている。その中には、「私の独走であったのか」という言葉も見える。



同和関係寺院協議会発会式

『真宗』1974年12月号
1974年10月23日、教団問題や糾弾会が行われる未曾有の宗門の危機の中、真宗大谷派同和関係寺院協議会は結成された。

実態調査の目的

この調査は、宗派における被差別部落寺院のおかれている実態を明らかにし、「真宗大谷派同和関係寺院協議会」(以下、「同関協」) 設立の目的である部落差別の克服にむけた活動と、宗派における部落差別問題への取り組みの基礎資料を得ることを目的とした。

この調査は、「同関協」が主体となり、宗派が協力して実施したものである。

「同関協」は、１９８０年に宗務当局に提出した「三要求」のなかで、「宗政の責任において同和関係寺院の実態調査を実施せよ」と要求をしてきたが、今回までその実施に至らなかった。これまで会員に対して数回のアンケート調査を行なってきたが、その中には、実態的な差別を報告する意見がみられた。被差別部落寺院における経済的負担の問題や、寺院間の交流のありかた、部落差別と信仰に関わる差別などである。

しかし、被差別部落寺院と所属門徒に対するこうした差別をふくめた実態が、個々の例として報告されていても、それが各地域において共通しているのかどうか、それぞれを比較することも出来ずに済まされてきた経緯がある。

今回、被差別部落寺院の実態について、寺院どうしの交際、経済、教化、組織、地域との関わりなど、様々な項目から、その具体的な姿が浮かび上がるよう、他の寺院との比較を行ないながら調査を行なった。

		合計	被差別部落門徒の割合					所属連区				
			全 て	5 割 以 上	1 5 割 以 上	1 割 未 満	い な い	東 北 連 区	北 陸 連 区	東 海 連 区	近 畿 連 区	九 州 連 区
部落問題のポスター・ビラ	総数	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
		594	49	17	17	66	431	124	74	131	185	69
	ある	37.4	32.7	47.1	64.7	56.1	34.1	37.1	21.6	29.0	41.1	62.3
		222	16	8	11	37	147	46	16	38	76	43
	ない	62.3	67.3	52.9	35.3	43.9	65.4	62.9	78.4	71.0	57.8	37.7
		370	33	9	6	29	282	78	58	93	107	26
	無回答	0.3					0.5				1.1	
		2					2				2	
身元調査お断りプレート	総数	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
		594	49	17	17	66	431	124	74	131	185	69
	貼っている	39.2	38.8	29.4	35.3	43.9	39.7	26.6	16.2	37.4	54.6	50.7
		233	19	5	6	29	171	33	12	49	101	35
	貼っていない	54.2	55.1	58.8	58.8	53.0	53.4	65.3	66.2	58.8	40.5	49.3
		322	27	10	10	35	230	81	49	77	75	34
過去帳に閲覧禁止の帯封	総数	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
		594	49	17	17	66	431	124	74	131	185	69
	貼付している	42.6	26.5	41.2	52.9	42.4	44.5	38.7	29.7	48.1	46.5	43.5
		253	13	7	9	28	192	48	22	63	86	30
	貼付していない	51.0	67.3	52.9	41.2	54.5	49.0	58.1	58.1	45.0	47.0	52.2
		303	33	9	7	36	211	72	43	59	87	36
	帯封やステッカーの存在を知らなかった	6.2	6.1	5.9	5.9	3.0	6.3	3.2	12.2	6.9	5.9	4.3
		37	3	1	1	2	27	4	9	9	11	3
	無回答	0.2					0.2				0.5	
		1					1				1	

部落問題のポスターなどの掲示・貼付(寺の属性)

この表は、部落問題の取組みごとに、門徒の割合や連区単位での違いを比較したものである。今回の調査の傾向であるが、部落問題の取り組みに対して被差別部落の門徒を抱える寺院でも、積極的・優位な数値は見られない。地域別では、明らかな偏りが見える。

	合計	被差別部落門徒の割合					教区				
		全 て	5 割 以 上	1 5 割 以 上 割 未 満	1 割 未 満	い な い	東 北 連 区	北 陸 連 区	東 海 連 区	近 畿 連 区	九 州 連 区
総数	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
	594	49	17	17	66	431	124	74	131	185	69
信心の課題として取り組むべき問題である	57.4	55.1	64.7	76.5	68.2	55.9	56.5	55.4	51.1	56.8	78.3
	341	27	11	13	45	241	70	41	67	105	54
信心の課題とは別で、社会問題として取り組む問題である	22.6	22.4	17.6	11.8	22.7	23.2	27.4	16.2	29.8	22.7	10.1
	134	11	3	2	15	100	34	12	39	42	7
お互いの信心さえはっきりすれば、おのずから差別はなくなるので取り組む必要はない	8.4	10.2	5.9		6.1	8.6	6.5	14.9	10.7	7.6	2.9
	50	5	1		4	37	8	11	14	14	2
信心の課題とは思わない	7.6	10.2	11.8	5.9	3.0	7.7	5.6	10.8	6.9	8.6	4.3
	45	5	2	1	2	33	7	8	9	16	3
無回答	4.0	2.0		5.9		4.6	4.0	2.7	1.5	4.3	4.3
	24	1		1		20	5	2	2	8	3

部落問題を信心の課題とする考えへの評価(寺の属性)①

ここでは部落問題は信心の課題であるかという問いに対して、被差別部落の門徒を抱える寺院で平均値を下回っている。これまでの取り組みが被差別部落の門徒を抱える寺院に届いていないといえる。または、これまでの宗派の取り組みに対して異論・異議の表れかもしれない。今後も注目して補足調査が必要である。

実態調査の目的

同和事業が終了してやがて 10 年。かつての「寝た子をおこすな」という意識が、またも大きくなりつつあるという状況が、派内の部落寺院の動向の背景にあると思われる。すなわち、部落差別問題に取り組むことへの消極的な拒否ではなく、取り組みそのものに対する異論・異議が表明と見るべきであろう。このような状況のなか、部落差別の問題に取り組みつづけていくためには、強固な主体性と意志が必要である。

今回の調査では、宗派の差別問題への取り組みは 8 割が肯定的にみているが、部落差別問題を信心の課題とするという考えに対し、肯定的評価は 57.4％にとどまっている。このことは、この間の宗派の取り組みが、部落差別問題を信心の課題とするまでには深められていないことを、物語っていえよう。

報告書のまとめ

被差別部落の内外、社会全体に蔓延する「寝た子をおこすな」という考えにたいして、解放運動としてどう捉えるのか。この考えの中にある善意という差別意識の克服が、これからの重要課題といえる。